

いわ くら はた えだ
岩 倉 幡 枝 2 号 墳

- 木棺直葬墳の調査 -

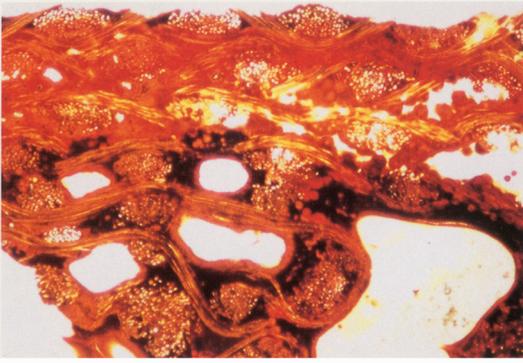
京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 12 冊

1993

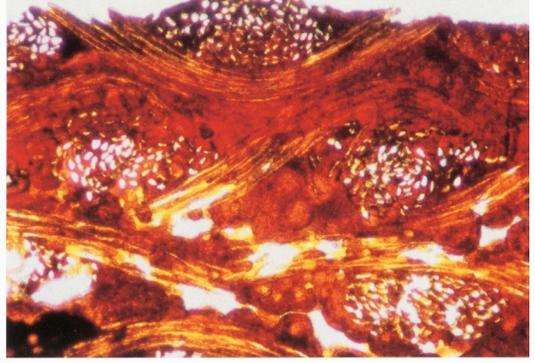
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



岩倉幡枝 2 号墳全景 (南から)



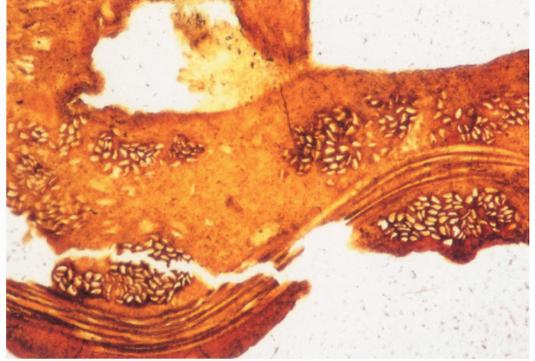
1 貼り重ねられた布の断面 (試料 1、× 40)



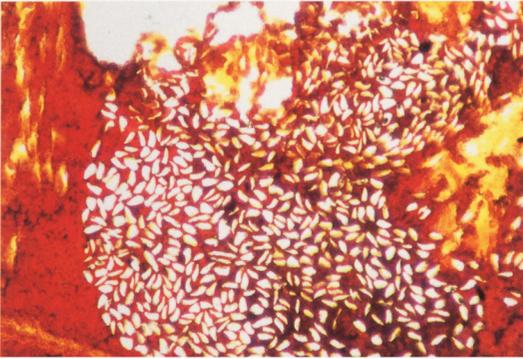
2 同上部の断面 (絹、試料 1、× 100)



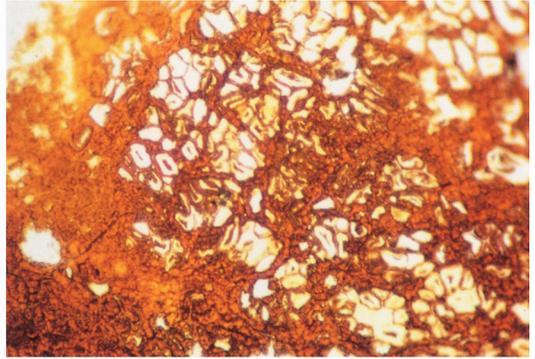
3 絹布の経糸断面 (40本のグループ、試料 3、× 100)



4 絹糸の緯糸断面 (80本のグループ、試料 2、× 100)



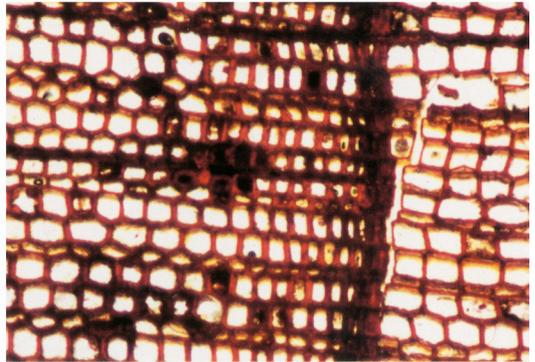
5 絹紐断面 (約 300本のグループ、試料 3、× 160)



6 植物繊維布の断面 (試料 3、× 160)



7 矢柄の断面 (タケ、鉄鍔 64、× 32)



8 鞘の木質断面 (ヒノキ科、東棺鉄剣 21、× 100)

布・矢柄・鞘の木質断面 (顕微鏡写真)

序

このたびの、研究所が第12冊として報告する岩倉幡枝2号墳は、京都から岩倉へ入る道の片脇にある、墳丘もめだたない古墳である。その道は京都市道の岩倉上賀茂線と呼ばれながら、ごく近年までは荷車が通る狭い峠道であった。しかし、峠を登りつめたあたり、瓦窯があり、昭和の初め頃、その一つが、京都に都が遷される前にたてられた寺に瓦を供給した窯があることが知られ、窯は一つと限らず多数にその跡をのこしていることが知られるようになった。

そうとみれば、その窯を築成する中にまじって今度発掘された古墳群があったのであり、その地名に応じて、幡枝2号墳と名づけられるような古墳群であったわけである。この山続きにはなお、ケシ山古墳群があり、他に京都北山には林山・西山・本山と名づけられる古墳群がある。

これら古墳群は、その山の裾に居住していた人達、とくにそれより南に村落を形成していた人達の奥津城と考えることも当然なことであろう。

その人達は、このたび発掘調査を終えた、ここに報告するような、古墳形式の時代にも生活していたことが明らかになった。今知られている住居跡もそれに見合うものがあることを思えば、その時期の人達の生から死への生活をたどることもできよう。すればここに報告する古墳の意味は深く、それはとりもなおさず平安京造成以前の、とくに北部についての歴史にあかりをつけたことを意味する。

生きている者が、ある時を得て死を得る。その死をどう葬ったか。その葬りの形式が、後の都の人達のそれを考えていくのにも役立つ拠点を得たというべきものである。この報告が持つ意義は極めて大きい。

1993年9月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 杉 山 信 三

例 言

- 1 本書は、昭和63年(1988)7月19日から11月16日にかけて京都市左京区岩倉幡枝町^{いわくらはなえだちょう}412-3、および4番地において実施した幡枝2号墳の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、市道岩倉上賀茂線道路改良工事に伴い実施した。
- 3 発掘調査は、京都市埋蔵文化財調査センターの指導のもと、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。
- 4 本書で使用した方位・座標は平面直角座標系VIによる。また水準高はT. P. である。
- 5 本書で使用した京都市発行の都市計画基本図(1:2,500、幡枝)は、京都市長の承認を得て調整して使用した。
- 6 本書の原稿執筆は以下のとおりである。
第3章2 第4章3 須恵器 内田好昭
第3章4 網 伸也
付 載 岡田文男
上記以外 丸川義広
- 7 本書の写真は、遺構の一部を除き牛嶋 茂(現奈良国立文化財研究所)と村井伸也が、顕微鏡写真は岡田が撮影した。金具のX線写真は内田俊秀氏(京都芸術短期大学助教授)にお願いした。
- 8 本書の構成・編集は、所長杉山信三、理事田辺昭三の指導のもと丸川が行い、平方幸雄と内田、能芝妙子が協力した。
- 9 発掘調査、ならびに報告書作成に関しては下記の方々から御教示・御協力をいただいた。
荒川 史 秋山浩三 内田俊秀 内山敏行 川西宏幸 河野一隆 高妻洋成
小林謙一 清水和明 平良泰久 高橋克壽 高橋美久二 田中清美 千種 浩
永井義博 西山要一 服部定治 菱田哲郎 松井忠春 山本輝雄 和田晴吾
京都大学考古学研究会(順不同・敬称略)

本文目次

| | |
|---------------------|----|
| 第1章 調査経過 | 1 |
| 1 調査に至る経緯 | 1 |
| 2 調査地の位置と環境 | 2 |
| 3 調査の経過 | 7 |
| 4 調査体制 | 11 |
| 第2章 墳丘と主体部 | 14 |
| 1 墳丘 | 14 |
| 2 主体部 | 16 |
| 第3章 遺物 | 18 |
| 1 出土状態 | 18 |
| 2 土器類 | 19 |
| 3 鉄器類 | 22 |
| 4 その他の遺物 | 24 |
| 第4章 まとめ | 28 |
| 1 墳丘の構築方法 | 28 |
| 2 遺物の出土状態と墳丘祭祀 | 29 |
| 3 出土遺物の特徴 | 31 |
| 4 幡枝古墳群について | 35 |
| 5 古墳の被葬者とその性格 | 36 |
| 付載 鉄錆に被覆された有機質遺物の分析 | 51 |

図 版 目 次

- カラー図版 1 岩倉幡枝 2 号墳全景
カラー図版 2 布・矢柄・鞘の木質断面
- 図版 1 遺跡 幡枝 2 号墳周辺の空中写真
図版 2 遺跡 幡枝 2 号墳全景
図版 3 遺跡 1 調査前全景
2 調査前全景
図版 4 遺跡 1 東棺上北部での須恵器出土状態
2 東棺上南部での須恵器出土状態
図版 5 遺跡 1 古墳全景
2 主体部全景
図版 6 遺跡 1 主体部全景
2 東棺全景
3 東棺内鉄剣・金具出土状態
図版 7 遺跡 1 西棺全景
2 西棺内鉄剣・鉄刀出土状態
図版 8 遺跡 1 墳丘全景
2 葺石の状態
図版 9 遺跡 1 墳丘の半截状態
2 墳丘断面
図版 10 遺跡 1 No. 1 地点断面
2 No. 3 地点断面
図版 11 遺物 須恵器 1
図版 12 遺物 須恵器 2
図版 13 遺物 須恵器 3
図版 14 遺物 須恵器 4
図版 15 遺物 須恵器 5
図版 16 遺物 鉄器 1

- 図版 17 遺物 鉄器 2
- 図版 18 遺物 鉄器 3
- 図版 19 遺物 鉄錆付着の有機質顕微鏡写真
- 図版 20 遺跡 墳丘測量図
- 図版 21 遺跡 主体部実測図
- 図版 22 遺跡 葺石実測図
- 図版 23 遺跡 墳丘断面図
- 図版 24 遺物 須恵器実測図 1
- 図版 25 遺物 須恵器実測図 2
- 図版 26 遺物 鉄器実測図 1
- 図版 27 遺物 鉄器実測図 2

挿 図 目 次

| | |
|------------------------------|----|
| 図 1 調査地位位置図 | 1 |
| 図 2 岩倉盆地の地形分類図 | 3 |
| 図 3 岩倉盆地の遺跡分布図 | 5 |
| 図 4 本山神明 1 号墳の石室実測図 | 6 |
| 図 5 幡枝 1 号墳出土「夫火竟」銘四獣鏡 | 7 |
| 図 6 墳丘区分概念図 | 8 |
| 図 7 調査地周辺の測量図 | 9 |
| 図 8 墳丘・周溝断面図 | 15 |
| 図 9 東棺内の遺物出土状態 | 17 |
| 図 10 東棺上の須恵器出土状態 | 18 |
| 図 11 土師器壺実測図 | 21 |
| 図 12 埴輪拓影・実測図 | 24 |
| 図 13 平瓦拓影・実測図 | 25 |
| 図 14 軒丸瓦・軒平瓦拓影・実測図 | 25 |
| 図 15 嶋尾拓影・実測図 | 26 |
| 図 16 嶋尾復原図 | 26 |
| 図 17 墳丘断面の比較 | 28 |

| | | |
|------|---------------|----|
| 図 18 | 墳頂部での遺物出土状態 | 30 |
| 図 19 | 中村 5 号墳出土の帯金具 | 33 |
| 図 20 | 宇治二子山古墳出土の鉄鏃 | 34 |
| 図 21 | 幡枝古墳群分布図 | 36 |
| 図 22 | 墳丘測量図の比較 | 37 |

表 目 次

| | | |
|-----|-----------|---------|
| 表 1 | 出土繊維の織り密度 | 54 |
| 別表 | 土器観察表 | 44 ~ 49 |

写 真 目 次

| | | |
|-------|--------------|----|
| 写真 1 | 慰霊祭 | 10 |
| 写真 2 | 積土の排除 | 10 |
| 写真 3 | 墳頂部での検出作業 | 10 |
| 写真 4 | 東西断面のはぎ取り | 11 |
| 写真 5 | 封土の状態 | 15 |
| 写真 6 | 杯底部のへら記号 | 19 |
| 写真 7 | 高杯蓋天井部の櫛描列点文 | 21 |
| 写真 8 | 土師器壺 | 21 |
| 写真 9 | 金具の X 線写真 | 22 |
| 写真 10 | 鷗尾 | 26 |
| 写真 11 | 須恵器破片 | 32 |
| 写真 12 | 顕微鏡標本の製作工程 | 52 |

第1章 調査経過

1 調査にいたる経緯

幡枝2号墳は京都市左京区岩倉幡枝町412-3および4番地に所在する。ここは下鴨から深泥池の西側を抜けた道が岩倉盆地に入る、ちょうど盆地の入口にあたる場所である。下賀茂から北上して岩倉盆地に入る道を市道岩倉上賀茂線と呼ぶ。幡枝2号墳はこの市道に接し、道路の拡幅工事によって削平されることになったため、発掘調査を実施した古墳である。

市道岩倉上賀茂線は元来、丘陵の裾を蛇行する小規模な道であった。昭和の初め頃に峠の切り通し部分で拡幅工事が行われ、道幅が広げられた。戦後に入って岩倉盆地の開発が

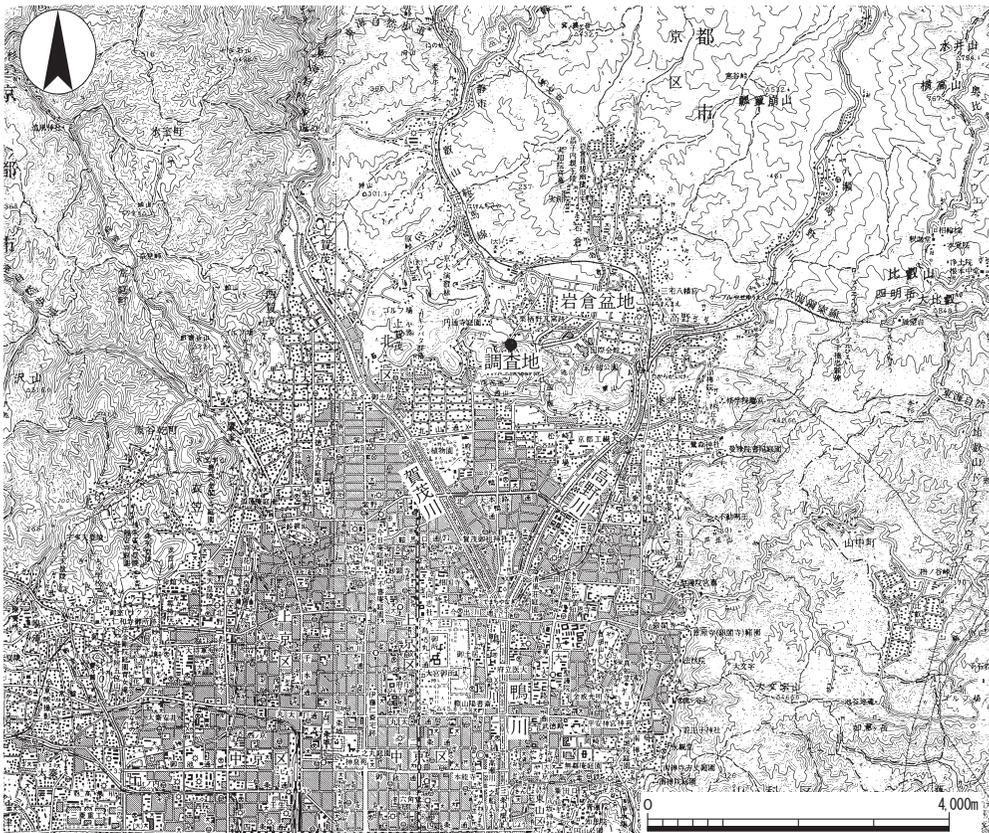


図1 調査地位置図(国土地理院1:50,000 地形図『京都西北部』・『京都東北部』を調整使用)
(1:100,000)

急速に進むと、増え続ける交通事情に対応して直線的な広い道路を敷く必要が生じた。こうして、市道岩倉上賀茂線は「都市計画道路」に決定され、幅員 13m 前後の岩倉盆地を縦走する基幹道路として計画されたのである。

調査開始当時、すでに古墳の所在する箇所から北東方向にかけては工事が終了している状態であった。ところが、古墳から南の深泥池西岸にかけては、狭隘な自然地形とともに埋蔵文化財である本古墳の存在、さらには天然記念物に指定されている深泥池^{註2}の環境保全問題とも絡んで、早急には工事が実施できない状態であった。しかしこの範囲は幅員が 5m ならずしかなく、大型バスが頻繁に運行することもあるため、地元からは早急に道路を拡幅してほしいとの要望が出されていた。こうした地元の要請を受けて、道路の拡幅工事がはじめられることになった。工事を主轄する京都市建設局道路部道路建設課は、京都市文化観光局埋蔵文化財調査センターと協議を行い、削平される可能性のある幡枝 2 号墳については発掘調査を行うこと、また路線内の遺跡についても踏査を行ってその状態を明らかにすることとなった。そして、実際の発掘調査については財団法人京都埋蔵文化財研究所が委託を受けて行うこととなり、昭和 63 年（1988）7 月より調査を開始した。

2 調査地の位置と環境

地理的環境 岩倉盆地は、京都盆地の東縁を画す花折断層に接し、その西側にできた陥没盆地である。盆地の形状は、北で西に傾いた Y 字形を呈し、広さは東西が最大 2.3km、南北が最大 2.8km、最小 1.0km を測る。

岩倉盆地には二つの河川が流れ込んでいる。一つは長代川^{註3}で、盆地の北西二軒茶屋付近に源を発し、幡枝・木野方面に南東流する。もう一つは岩倉川で、盆地の北端から真南に流れる。二つの河川は宝ヶ池の北方で合流し、さらに上高野では、八瀬からの水を集めた高野川と合流して京都盆地に流れ出る。

岩倉盆地では、山地・丘陵の裾に扇状地がみられ、盆地底は低平な沖積平野が広がっている。四周を限る山地・丘陵地^{註4}は、標高 100 ～ 300m 前後の高さを有する。これらの山地は、丹波高原を形成する山地の最南端にあたる。また、盆地の南方を限る西山・東山などからなる松ヶ崎丘陵や氷室山は、北西から延びる丘陵が侵食されて独立丘陵状の地形を呈するようになったもので、この南側を画す丘陵によって北側からの土砂の搬出が妨げられ、今日の岩倉盆地が形成されたのである。

扇状地は盆地東端の岩倉長谷町付近、北端の岩倉中在地町付近、北側の木野付近、西側

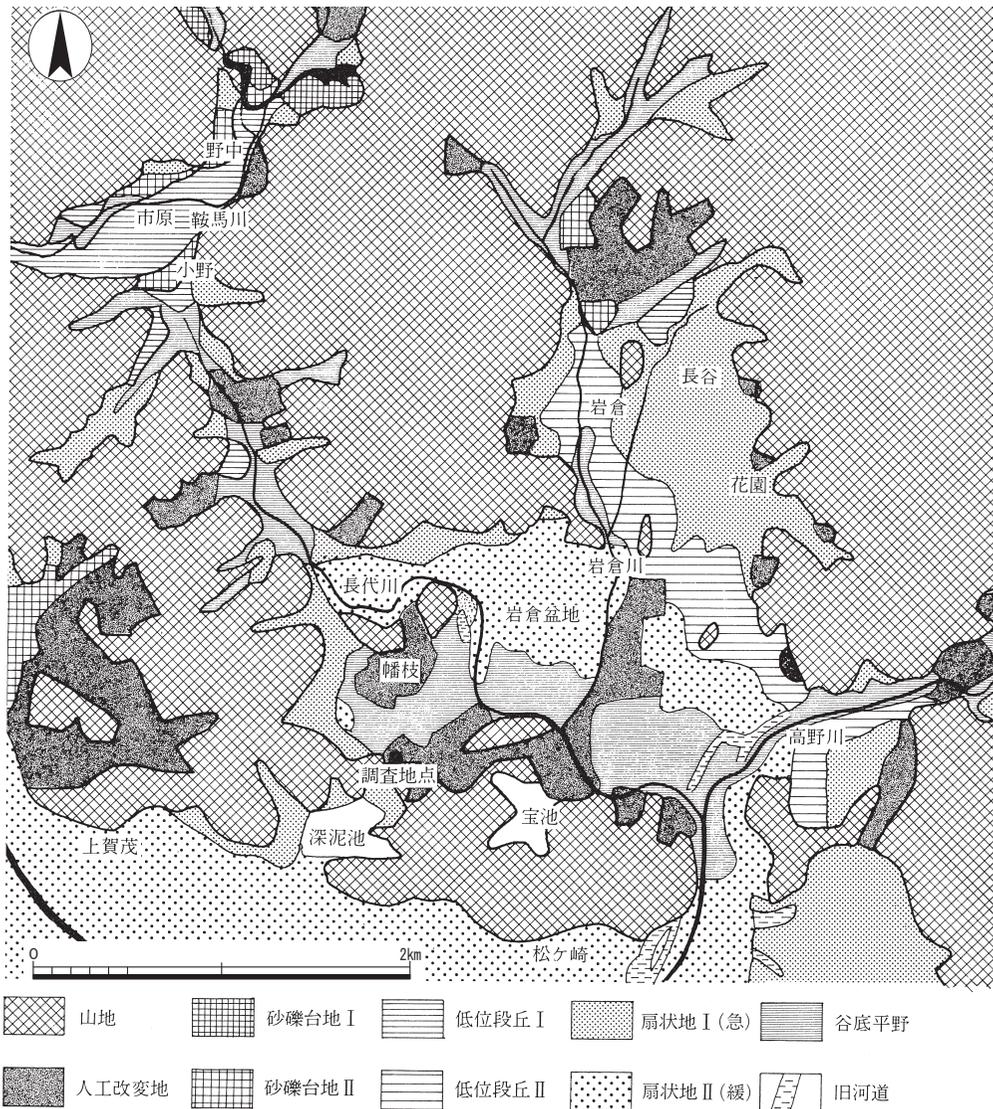


図2 岩倉盆地の地形分類図(『土地分類基本調査』1982年より作成)(1:40,000)

の幡枝付近などで認めることができる。このうち最もよく発達したものが岩倉長谷町付近の扇状地で、ここでは南西に緩やかに傾斜する地形をみることができる。

盆地底に広がる沖積平野部は、概算で東西1.5km、南北1.2kmの規模を有する。平野の中心部は岩倉下在地町付近で、その標高は90m台を測る。南の上賀茂、松ヶ崎付近の平野部は標高70m台を測るので、岩倉盆地側が20mほど高いことがわかる。盆地底の平野部は、長らく水田地帯となってきたが、近年急速に宅地化が進行し岩倉盆地の景観を変えつつあ

る。

次に、岩倉盆地の地質について述べると、盆地の四周を囲む山地・丘陵地は、砂岩・チャート・頁岩などが褶曲してできた丹波帯と呼ばれる古世代の岩石層からなっている。その内容は場所によって若干異なるが、最も広範囲に分布するのは、砂岩と灰色チャートの中に頁岩を含む互層構造のもので、これは盆地のほぼ全周に分布している。その他、花園地区の東側には、輝緑凝灰岩・輝緑板岩が分布している。

扇状地を構成する地層は、礫を主体とする堆積物からなっており、これらは地質学上、更新統上部とこれより新しい完新統に区分される。

盆地底の沖積平野は、泥を主体とする堆積物で構成された軟弱な地層でできている。この泥を主体とする堆積物は、岩倉盆地が低湿地の頃に堆積した最も新しい地層である。ここでは、幡枝町の東部において地表下 3.2m 付近で始良 Tn 火山灰と大山系の火山灰が発見されており、堆積年代を推定する有力な資料となっている。^{註5}

歴史的環境 岩倉盆地では現在までのところ古墳と窯跡が数多く確認されている。ここでは幡枝 2 号墳の歴史的な性格を理解するため、主に岩倉盆地の古墳群について記述を進める。

岩倉盆地の古墳群は、北から八幡古墳群、本山古墳群、幡枝古墳群、ケン山古墳群、西山古墳群、林山古墳群の 6 つが確認されている。いずれも、盆地の西・南側丘陵部に築かれ、南西に片寄った分布状態がみられる。以下、各古墳群ごとに概略を記す。

①八幡古墳群 『京都市遺跡地図台帳』昭和 61 年 (1986) などでは、3 基の古墳が明示される。しかし、京都大学考古学研究会の踏査では北西の 1 基は確認できないと報告されている。確認される 1 基は、横穴式石室の側壁が露出し、他の 1 基も天井石が露出することから横穴式石室を主体部に持つ古墳とみられる。^{註6}

②本山古墳群 京都市側から鞍馬に通じる街道の西側丘陵部に所在する。各遺跡地図では、丘陵頂部、丘陵斜面に 40 基前後の古墳が明示されるが、京都大学考古学研究会の踏査では確認されない古墳も多いとされる。大半の古墳は内容が明らかでないが、唯一内容が判明した古墳がある。昭和 38 年 (1963) に発見・調査された本山神明 1 号墳がそれで、主体部の横穴式石室は玄室が横方向に広い「T 字形石室」と呼ばれる特異な形態を持ち (図 4)、須恵器・鉄刀・刀子・鉄鏃・鉄斧・耳環・土玉などの遺物が出土している。^{註7} 築造時期は 6 世紀前半と推定され、群集墳の開始時期を考える上で重要な古墳である。

③幡枝古墳群 深泥池北方の市道を挟む両側の平野・丘陵部に位置する。各遺跡地図で



- 1 皆越窯跡 2 中の谷窯跡 3 木野窯跡 4 妙満寺裏庭窯跡 5 妙満寺窯跡 6 元稻荷窯跡 7 栗栖野瓦窯跡
 8 窯跡(?) 9 円通寺瓦窯跡 10 南ノ庄田瓦窯跡 11 窯跡 12 ケシ山炭焼窯跡 13 深泥池瓦窯跡
 14 木野墓窯跡 15 深泥池東岸窯跡 16 芝本瓦窯跡

図3 岩倉盆地の遺跡分布 (1:20,000)

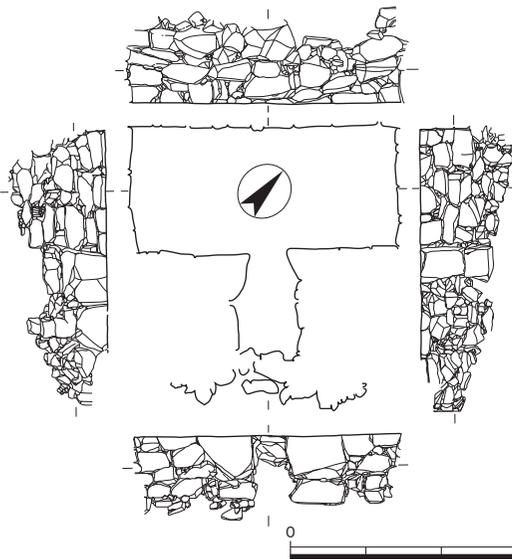


図4 本山神明1号墳の石室実測図
 (『第38とれんち』を一部改変)(1:100)

は合計17基の古墳が明示され、京都大学考古学研究会の報告でも6基の古墳の測量図が公表されている^{註8}。丘陵部の古墳は、横穴式石室を主体とする可能性が高い。また、岩倉自動車教習所の敷地には、かつて鉄剣、管玉とともに、「夫火竟」銘四獣鏡が出土した「幡枝1号墳」があった^{註9}。今回調査した幡枝2号墳は、この「幡枝1号墳」と同様の立地条件を持ち、通常の群集墳に比べ築造時期が古い点で共通性がある。幡枝古墳群の構成については、第4章4で詳述する。

④ケシ山古墳群 深泥池北西のケシ

山頂部(標高178m)にケシ山古墳が単独で築かれている。円墳で、直径が22m、高さ2.5mの規模を持つ^{註10}。丘陵頂部に単独で立地すること、規模が大きい点で有力な被葬者が想定できる。さらに、各遺跡地図では南と東の斜面に5基の古墳が明示されているが、現状はいずれも明確でない。また、現在テニスコートとなる東の裾部にも、「マスヅカ」と称される古墳が存在したとされるが、今は削平されて存在しない^{註11}。

⑤西山古墳群 深泥池南方の西山頂部(標高133m)に立地する。京都大学考古学研究会の報告で、尾根線上に立地する古墳の測量図が公表されている^{註12}。墳形が長方形のものや張り出し部を持つものがあり、通常の群集墳と異なる内容は注目される。

⑥林山古墳群 『京都市遺跡地図台帳』(1986)では、「散布地」として登録されていたものである。京都大学考古学研究会の踏査によって、東西の尾根線上に4基の古墳が存在することが明らかとなった^{註13}。

以上が岩倉盆地に築かれた古墳群の概況である。その内容を整理すると、古墳の立地は平野部、丘陵斜面、丘陵頂部と多様であること、平野部には時期の古い古墳が築かれること(幡枝1号墳・2号墳)、丘陵頂部の古墳は規模が大きいこと(ケシ山古墳、幡枝古墳群中の1基)、円墳でない古墳が存在すること(西山古墳群)、特異なT字形石室を持つ古墳が存在すること(本山神明1号墳)、大半の古墳は通常の群集墳と想定されることな

どであろう。

上記した古墳群の内容に対し、岩倉盆地では集落遺跡の内容がほとんど明らかになっていない。盆地北部に位置する岩倉中在地遺跡では、石鏃、石匙、高杯、白磁、宋銭が、盆地中央に位置する岩倉忠在地遺跡では、縄文土器、弥生土器、須恵器、中世陶器が採集されているが、竪穴住居は確認されておらず、「散布地」として登録される程度で詳しい内容はわかっていない。

飛鳥時代に入ると、岩倉盆地では窯業生産が開始される。まず、7世紀前半に幡枝元稻荷窯、深泥池東岸窯の操業が開始される。幡枝元稻荷窯は瓦陶兼業窯で、北野廃寺の瓦を焼いた窯として有名である。7世紀後半に入ると、木野墓窯やケシ山窯で操業が始まる。前者は北白川廃寺に瓦を供給していたことが判明している。また奈良時代には瓦生産が衰退し、代わって須恵器生産が盛んとなる。8世紀末に平安京の造営が始まると、岩倉盆地は都への瓦の供給地となり、再び窯業生産は活況を呈する。この時期、栗栖野や小野には官窯が置かれたことが『延喜式』に記載されている。平安時代後期に入ると、岩倉での瓦生産はさらに活発になる。これは院政期に入って御所や寺院の造営が活発化したことによるものと考えられている。

このように、現在岩倉盆地で知られる遺跡は古墳と窯跡が中心で、集落遺跡は内容がほとんど解明されていないのが実状である。こうした点で、盆地の中央に位置する岩倉忠在地遺跡の存在は重要といえる。

3 調査の経過

調査方法 古墳の削平が懸念されたため、墳丘については全面調査を行い、主体部の調査が終了した後も、墳丘の築造工程を解明する方針で調査を進めた。当初、横穴式石室を持つ古墳を想定し、盗掘壊らしき凹みの方位を参考に墳丘上に十字のアゼを設定した。し

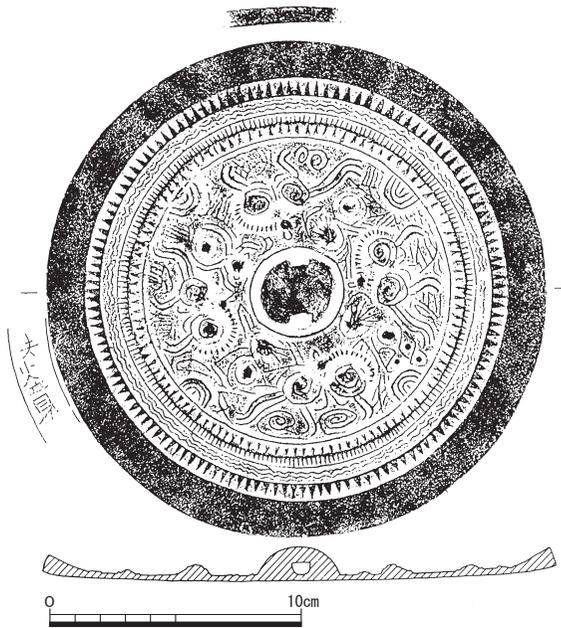


図5 幡枝1号墳出土「夫火竟」銘四獣鏡
(『京都考古』第44号より)(1:3)

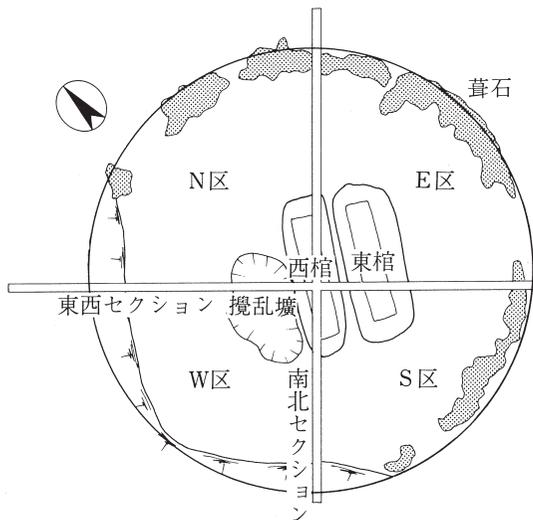


図6 墳丘区分概念図

東西セクションについて、土層のはぎ取りを行った。

なお、発掘調査はすべて人力で行ったが、周囲に排土を置く余地がないためにベルトコンベヤーから直接ダンプカーに積み込む方法を取った。しかし、墳丘を覆う積土が予想以上に多量であったことや土捨場が遠距離であったことが、調査を遅らせる結果となった。

日誌抄

昭和63年(1988)7月19日(火) 現地に機材を運び込む。慰霊祭を行う。

7月20日(水)～7月22日(金) 墳丘の下草片付け、墳丘測量を行う。墳丘上に十字のアゼを設定する。

7月25日(月)～7月29日(金) 墳丘上の積土を排除する。積土が予想外に多い。墳丘上から古式の須恵器が出土する。アゼを設定し直す。

7月30日(土)～8月3日(水) 積土の排除に努める。E区・N区にて葺石を検出する。

8月4日(木)～8月8日(月) 積土

の排除。S区でも葺石が巡ることを確認。墳頂で須恵器がまとまって出土する。横穴式石室の形跡がないことを確認。
8月9日(火)～8月18日(木) 主にW区・N区の積土を排除する。
8月19日(金)～8月24日(木) 墳頂部で主体部の検出に努める。須恵器は出土するが主体部は不明。
8月25日(木)～8月27日(土) S区で周溝を検出し掘り下げる。
8月26日(金) 木棺らしき輪郭を検出。
8月29日(月) 主体部の掘り形を検出。
東西2.9m、南北4.4mとかなり大きい。

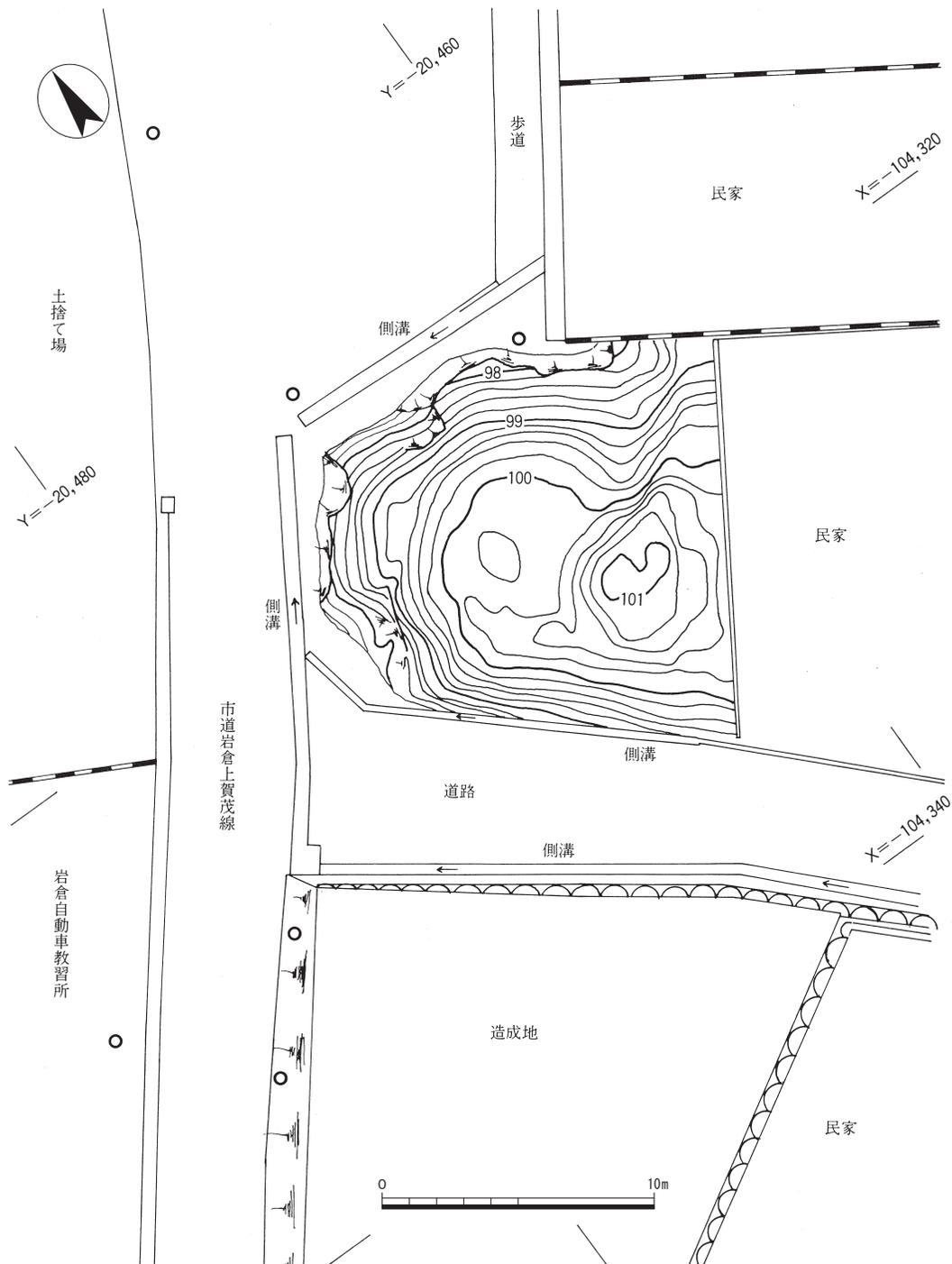


図7 調査地周辺の測量図 (1:250)

8月30日(火)～9月8日(木) 木棺とみられる黒色土を掘り下げる。並行して葺石の検出を進める。基底の石が大きいこと、墳丘封土と旧表土の関係などが判明する。

9月9日(金)～9月13日(火) 南北方向の木棺が2基並列することをようやく確認。木棺内の精査を行う。

9月14日(水) 木棺内の精査を進める。西棺で鉄剣・鉄刀、東棺でも鉄剣・鉄刀と金具が出土する。

9月18日(日)～9月21日(水) 全景撮影のために清掃を行う。

9月22日(木) 全景写真を撮影。合わせて写真測量を行う。

9月26日(月)～9月29日(木) 木棺の実測と墳丘測量を行う。

9月30日(金) 午前中に記者発表を行い、午後、棺内の遺物を取り上げる。

10月1日(土) 現地説明会の準備をする。

10月2日(日) 午前11時より現地説明会を開催。参加者約220名。

10月4日(火)～10月12日(水) 主体部の埋土をふるいにかける。葺石の見通図を作成する。

10月11日(火) 古墳の取り扱いを巡り道路課と埋蔵文化財調査センターが協議。現地保存は困難との結論が出る。

10月13日(木)～10月15日(土) W



写真1 慰霊祭(7/19)



写真2 積土の排除(8/11)



写真3 墳頂部での検出作業(8/26)

区より墳丘封土の掘り下げを開始する。

10月14日(金) 地元の明徳小学校6年生約90名が見学に来る。

10月17日(月)～10月18日(火) S区の封土を掘り下げる。

10月19日(水) W区・S区の封土を排除した状態で全景写真を撮影。

10月21日(金) W区・S区で再度、墳丘基底面まで下げた状態の全景写真を撮影。

10月24日(月) W区・S区間のセクションを外し、東西断面の写真を撮る。

10月25日(火)～10月29日(土) N区の封土を掘り下げる。並行して東西断面のはぎ取りを行う。

10月31日(月)～11月7日(月) E区の封土を掘り下げる。

11月8日(火) 封土を完全に除去した状態で全景写真を撮る。その後、墳丘基底面上の測量を行う。



写真4 東西断面のはぎ取り(10/27)

11月9日(水)～11月11日(金) 墳丘基底面を断ち割る。

11月12日(土)～11月15日(火) 葺石の写真撮影。道具片付け。周辺古墳の踏査などを行う。

11月16日(水) 機材などを引き揚げる。

4 調査体制

調査組織の構成 調査に携わった財団法人京都市埋蔵文化財研究所の組織構成は以下のとおりである。(昭和63年(1988)当時)

理事長 増田 駿

専務理事 阪本雅人

所 長 杉山信三

総務部 杉原和彦(部長) 主任(1) 事務職員(5) 嘱託(2)

調査部 永田信一(課長) 主任(6) 研究職員(24)

発掘調査 以下の者が発掘調査に携わった。(役職は当時)

主任 平方幸雄、研究職員 丸川義広、調査補助員 津々池惣一、作業員 明輝建設、

写真撮影 主任 牛嶋 茂、調査補助員 村井伸也、

測量 研究職員 辻 純一、調査補助員 宮原健吾、

はぎ取り 研究職員 岡田文男、調査補助員 大槻明義、

整理作業 調査終了後、速やかに図面の点検を行った。次いで平成元年(1989)4月か

ら5月にかけて、土器類の接合と鉄器の錆落としを行った。本格的な整理作業は平成3年(1991)7月から10月にかけて、出土遺物の接合、実測、原稿執筆と製図を行い、平成4年(1992)7月に作業をすべて終了した。整理作業に携わった者は以下のとおりである。

遺構図面 丸川義広(製図・原稿)

土器類 内田好昭(実測・製図・原稿)、能芝妙子(接合・点検)

鉄器類 岡田文男(錆落とし・保存処理・原稿)、丸川(実測・製図・原稿)

瓦類 網伸也(実測・原稿)、清藤玲子(製図)

復元 多田清治・村上勉(石膏)、出水みゆき・田中利津子・中村享子(彩色)

写真 村井伸也・幸明綾子(遺物撮影)

註

- 1 南ノ庄田瓦窯跡はこれらの工事に際して発見されたものである。
梅原末治「南庄田の一窯址」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第15冊 京都府昭和9年(1934)
- 2 深泥池は京都市北区深泥池町に位置し、昭和2年6月に天然記念物に指定された。名称を「深泥池水生植物群落」といい、氷河期の水生植物が良好に遺存することで著名である。『深泥池の自然と人』深泥池学術調査報告書 京都市文化観光局 1981年
- 3 長代川は、もとは静原付近に源を持つ静原川の延長流路として岩倉盆地に流入していたが、市原付近から賀茂川に流れ込む鞍馬川の下刻が進行した結果、流路が奪われ、今日の小川川になったと考えられる。これは、長代川が岩倉盆地に流れ込む関係で下刻が進まなかったのに対し、賀茂川に流れ込む鞍馬川の下刻の方が早かったために生じた「河川争奪」と呼ばれる現象である。この部分については、足利健亮「自然と景観」『史料京都の歴史』8左京区 平凡社 1985年を参照した。
- 4 山地と丘陵の区分は、京都盆地では主に基盤岩で構成された山地と、大阪層群からなる丘陵という地質的な区分がなされる。しかし岩倉盆地の場合は丘陵・山地の両方が丹波帯と呼ばれる古世層の岩石帯で構成されており、この区分はあてはまらない。
- 5 池田 碩・大橋 健・植村善博「京都市北郊岩倉盆地地下の火山灰層」『第四期研究』20 1982年
なお、地形・地質の項については、『第38とれんち』京都大学考古学研究会 1986年および、『土地分類基本調査 京都東北部・京都東南部・水口』京都府農林部耕地課 1984年を参照した。

- 6 ①『京都市本山・幡枝地区遺跡分布調査の記録』同志社大学文化史学専攻生・幡枝地区遺跡研究グループ 1971年
- ②小浜 成「八幡古墳群」『第39 とれんち』京都大学考古学研究会 1987年7
- 7 多賀茂治「本山神明1号墳」『第38 とれんち』京都大学考古学研究会 1986年
- 8 栗本祐司「幡枝古墳群」『第38 とれんち』京都大学考古学研究会 1986年
- 9 高橋美久二「京都市左京区幡枝古墳とその出土品」『京都考古』第44号 1987年
従来はこの古墳を単独に「幡枝古墳」と称してきたが、今回は同じ古墳群に属する点でこれを「幡枝1号墳」、そして今回調査の古墳を「幡枝2号墳」と呼ぶことにした。
- 10 吉田 広「ケシ山古墳」『第38 とれんち』京都大学考古学研究会 1986年
この中に墳丘測量図が掲載されている。
- 11 『京大絵図』寛保元年(1741)に墳丘が描かれている。
梶川敏夫他『ケシ山窯跡群発掘調査概要報告』京都市埋蔵文化財調査センター 1985年
年に指摘がある。
- 12 吉田 広「西山古墳群」『第39 とれんち』京都大学考古学研究会 1987年
- 13 木村大生「林山古墳群」『第40 とれんち』京都大学考古学研究会 1988年

第2章 墳丘と主体部

1 墳丘（図版2・20）

規模と形状 葺石裾で直径11.5m、周溝心で直径15.5m（復原）を有する円墳である。墳頂の平坦面は直径約6mある。墳丘の高さは、S区周溝底より墳頂まで2.4m、実際の盛られた部分は2.0mである。墳丘は完存する。ただし、W区では道路に接するため墳丘裾が削平され、墳端は確認できなかった。

葺石（図版8・22） W区を除く三方の墳丘斜面で葺石を検出した。葺石は基底石とその上部3段ないし4段が遺存する。斜面のどの範囲まで葺かれていたかは明らかでないが、転落した石材の量から推定しても墳丘全面に葺かれていたとは考えがたい。

葺石の中では、特に基底石の使われ方に特徴がある。基底石は、長さ30cmから40cm、厚さ15cm前後の扁平で細長い石材が用いられ、他の葺石より大きいこと、大きさが揃っていることなどが特徴としてあげられる。その葺き方は、長軸を墳丘側に寝かせ、貼りつけた状態で葺かれる。基底石以外の葺石は大小様々なものが用いられ、葺き方も乱雑で、前期古墳にみられる小口を墳丘側に突き刺すような葺き方はみられなかった。

葺石と墳丘の関係を観察するため、4箇所での断面観察を行った。その結果、これらの葺石は封土とともに葺かれるのではなく、墳丘をケズリ込んで石材を据え、背後を土で固定する状態が観察された。したがって、葺石は墳丘の盛り上げと平行して葺かれたのではなく、墳丘の盛り上げが終了して以降に墳丘裾を整形して葺かれた可能性が高いといえる。

周溝（図8） 地形の高い東側を掘り込んで周溝が巡る。しかし、東側では民家造成の際の積土が厚く堆積していたため、S区において部分的な調査を行うにとどまった。検出箇所での周溝の規模は、幅が3m以上、深さは、底から葺石基底石の下場まで1.0mを測る。周溝の埋土は4層に分けられ、下の2層は滞水した状態を示す泥土層、上の2層は整地された際の砂泥層であった。黄褐色砂泥には瓦を多く含む。また、溝底からは転落した葺石や須恵器が出土したが、須恵器には墳頂部で出土したのと同じ個体の破片が多数含まれていた。

墳丘封土の状態（図版9・10・23） 墳丘を構成する封土は、すべて人工的に盛られたものである。今回の調査では墳丘封土をすべて人力で排除し、古墳を築造前の状態にまで

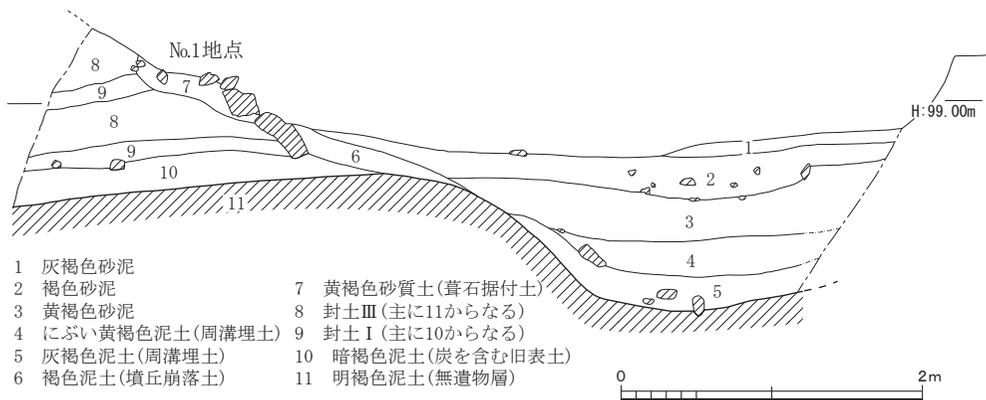


図8 墳丘・周溝断面図(S区、色調は『新版標準土色帖』による)(1:50)

戻す作業を行ったので、墳丘構築に関しては興味深い点が明らかとなった。

まず、古墳の基底には、明褐色泥土が認められる。この層はかたくしまった泥土層で、明らかな無遺物層である。この層の上に炭を含む暗褐色泥土が堆積する。この層は古墳築造当時の旧表土に相当する層であるが、上面を炭の層が薄く覆うことから、周囲一帯では「山焼き」のような行為が行われたものと考えられる。

墳丘を形づくる封土は、暗褐色泥土を主とする封土Ⅰと明褐色泥土を主とする封土Ⅲの混じりあった状態で構成される。両層は色調差が明瞭で、封土の分層は比較的容易であった。また、墳丘封土は全体として、下部ほど封土Ⅰが多いため暗い色調を呈し、上半部ほど封土Ⅲ、あるいはその下部に堆積する灰白色粘土が多く盛られることで明るい色調を呈する。これは基底下部にある層が墳丘の上半部に用いられた結果と解釈できる。

次に、墳丘断面の観察では、中央にまず小山を造り、その周囲を土盛りすることで全体を平坦化するという特徴ある盛り方が観察できた。こうしてできた平坦面を3面確認した。ここでは、下からA面、B面、C面とし、その上部をそれぞれ第1次封土、第2次封土、第3次封土として記述を進める。なお、記述に際しては全面を通して観察できた東西断面を中心に行う。

第1次封土 A面は旧表土面に相当し、上面には炭が含まれる。このA面を平坦にすることから墳丘の盛り上げは始められる。まず、西寄りに最初の小山が造られ、この周囲に封土Ⅰを中心とした土が盛られる。



写真5 封土の状態

ここでは旧表土層のブロックがよく識別できる（写真5）。最初の山を覆い尽くした段階で次の平坦面（B面）が造られる。第1次封土の厚さは約40cmで、西側ほど厚いが、これは地形の傾斜を是正しようとしたためであろう。

第2次封土 B面の中央部に同様の小山が造られる。最初はこの小山の東側に土が盛られ、これを覆う大きな山が造られる。第2次封土では、封土Ⅰと封土Ⅱが用いられるが、封土Ⅱの方が多くなり、さらに上部では封土Ⅳが帯状に入れられる。約70cm盛られたところで次の平坦面（C面）が造られる。

第3次封土 C面は主に灰白色粘土からなる封土Ⅳが多く用いられ、堅く締められている。この面でも、下のB面とほぼ同じ位置に小山が造られる。ここでも小山の東側が先に盛られ、全体を覆う大きな山が造られる。封土の構成は、第2次封土と変わらないが、明褐色泥土からなる封土Ⅲが多いこと、盛り方が細かく煩雑となって明瞭には分層できなかったことなどが特色としてあげられる。

なお、東西断面においてはC面上約70cmに平坦面らしき箇所が認められるが、これが第4次封土を区分する面に相当するものかは確証が得られなかった。また、B面とC面の間にも平坦面があり、これは特に南北断面で明確であった。しかし、この面は東西断面では明瞭でなく、小山の関係もうまく対応しないので、一つの面と認識するにはいたらなかった。ただ以上の2面は、封土が3次にわたると上記した内容に関連して、実際はさらに複雑な工程があったことを想定させるものとして重要であろう。

2 主体部（図版5・21）

2 棺の状態 木棺を直葬した主体部を2基検出した。墳頂中央のものを「西棺」、東側のものを「東棺」と呼ぶ。両棺は平行に置かれる。その主軸は、ともにN30°Eである。西棺の西側には盗掘壊らしき攪乱墳が1基あるが、この下には主体部は存在しない。両棺は深さが異なるものの、規模や形態、副葬品の内容は極めて類似する。ただし、その前後関係については、重複する箇所がなく明確な所見は得られなかった。

2棺内の埋土は周囲の土に類似し、墓壇の輪郭や棺の痕跡を検出するにあたっては苦慮するところが多かった。さらに、墳頂で須恵器が多量に出土したことも検出を妨げる一因となった。しかし、最終的には断ち割りをを行い、上記の内容に誤りがないことを確認した。

東棺（図版6） 墳頂の東寄りにある。墓壇は長さ4.2m、幅1.55m、深さ0.55mを有する。掘り込みの角度は比較的緩やかである。この中に長さ3.2m、幅0.65mの木棺が入れられ

たと想定される。木棺は痕跡から箱形とみられるが、小口板や側板の痕跡は検出できず、土層の境目で判断した。棺の底は、北と南の端が赤色顔料で赤く染まる。顔料の分布する面を床面と考えると、棺床は南側が15cmほど高い。

この東棺からは、鉄剣1振、鉄刀1振と金具が11点出土した。鉄剣(21)は棺の北半で西側に接しておかれ、切先を南にむける。鉄刀(22)は棺の南半で西側に接しておかれる。切先は南、刀身の刃は西側を向く。どちらもほぼ水平に置かれる。金具(1～11)は、鉄剣(21)の切先付近に散乱した状態で出土した。この棺では、被葬者の遺骸や玉類などの装身具は検出できなかったが、鉄剣・鉄刀の向きから頭位は北であったと推定される。

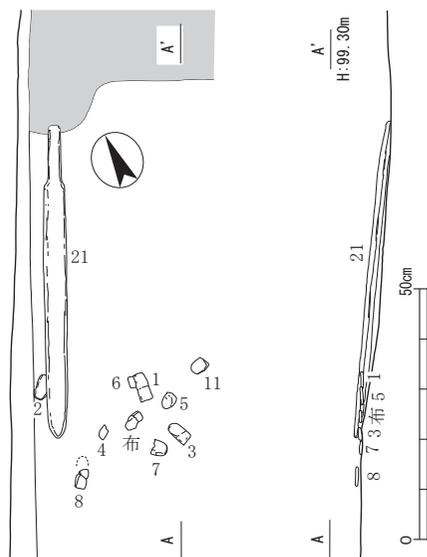


図9 東棺内の遺物出土状態
(番号は図版に対応)(1:15)

西棺(図版7) 墳頂のほぼ中央にある。墓壙は長さ4.0m、幅1.2m、深さ0.3mあり、東棺とほぼ同じ規模を有するが、東棺に比べ浅い点に特色がある。木棺の痕跡は、長さ3.35m、幅0.6mあり、東棺と同じく箱形と推定される。

この西棺も東棺と同じく北端と南端で赤色顔料がみられた。その高低差は、南側がわずかに高い。南端の土師器壺(図11)は、この顔料の上面で出土しており、棺内に納められた副葬品とみられる。なお、この付近は調査の際に若干掘り過ぎたため、顔料の広がりについては十分確認し得なかった。

北半で西側に接する形で鉄剣1振と鉄刀1振が出土した。東側に鉄剣(23)、西側に鉄刀(24)がほぼ平行に置かれる。いずれも水平におかれ、切先の方向も南を向く。鉄刀(24)の刃は西側を向く。この棺でも被葬者の遺骸や玉類などの装身具は検出できなかった。頭位は東棺と同じく北と推定される。

第3章 遺物

古墳に伴う遺物には土器類と鉄器類がある。これらは東棺・西棺の棺内と、墳頂部から出土した。その内訳は、東棺内では鉄剣1・鉄刀1・金具11、西棺内では鉄剣1・鉄刀1・土師器壺1、墳頂部では須恵器と鉄鏃・鉄鎌・刀子である。この他、墳丘上や周溝から飛鳥時代・平安時代の土器類・瓦類も出土している。

1 出土状態（図版4、図10・18）

東棺と西棺の棺内遺物の出土状態については、すでに前章で記した。ここでは墳頂部での遺物出土状態について若干述べる。

墳頂部からは、須恵器と鉄器が多数出土した。取り上げに際して、これらの平面位置と水準高を記録し、図10・18を作成した。これによって、須恵器片のほとんどが東棺の真上に、鉄器のほとんどが西棺の真上にあたることになる。

東棺上で出土した須恵器片は、棺の床面から60～80cm上部にあり、北端と南端の2箇所に集中して出土した。南の群には大型甕の破片が集中してみられたが、接合の結果、同じ個体が広範囲に広がることを確認され、また他の個体についても同様の傾向が確認できた。この他、須恵器の破片にはかなり小さな細片が含まれることや、破片が上下方向に立った状態で出土したことなども特徴として指摘できる。

これに対して、西棺の上部には須恵器片はなく、鉄器の破片が散乱する状態がみられた。鉄器の内容は、鏃・刀子・鎌であるが、ここでも破片の状態で出土したことは、墳丘祭祀との関

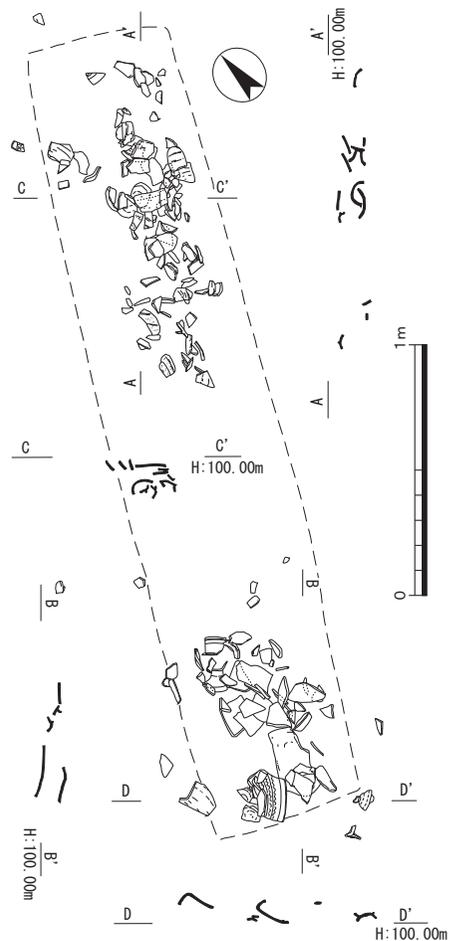


図10 東棺上の須恵器出土状態 (1:30)

係で注目される。

2 土器類（図版 11～15・24・25）

出土した土器類のうち古墳に伴うものは、ほとんどが須恵器である。土師器は少量出土したが、全体の形を復原できるものは西棺内出土の壺が1点しかない。その他に平安時代の須恵器・土師器が若干出土しているが、今回はふれない。

(1) 須恵器

杯・蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・高杯蓋・甕・直口壺・甕がある。杯・蓋・有蓋高杯・高杯蓋は各々3～6個の類型に分類したが、その背後に製作者単位の抽出を予測し、同時に各類型が時期差・地域差を導く可能性を考えた。

杯 たちあがりが高く内傾気味に立ち上がり、口縁端部は面を持つものが一般的である。器面調整は概して丁寧である。すべての個体の底部外面に回転ヘラケズリを認め、その範囲は受部以下の80%以上におよぶものがほとんどである。また、回転を利用しない不連続のケズリを認めない。杯A～Eの5類型に分類した。各類型は形態と製作手法、とりわけ底部内面の器面調整で明瞭に区分できる。

杯A(1～3) 他の類型に比してたちあがり最も高い。底部内面に横ナデを認めず、仕上げナデも明瞭に認めないが、平滑に仕上げる。

杯B(4～9) たちあがり比較的低い。底部内面の仕上げナデは広い範囲におよび丁寧である。

杯C(10～13) たちあがり内傾し反りが大きい。また底部が丸みを帯びる。底部内面の仕上げナデを中央部の狭い範囲にのみに認める。

杯D(14・15) たちあがり直線的に内傾する。また、底部が丸味を帯びる。底部内面に仕上げナデを認めず、中央部にまで横ナデがおよぶ。(14)の底部外面にはヘラ記号「一」が焼成前に陰刻される(写真6)。

杯E(16) たちあがり比較的低く内傾度が大きい。また他の類型に比して受部が突出せず、丸味を帯びる。底部内面の

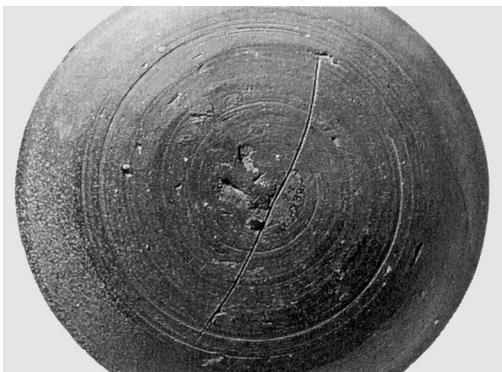


写真6 杯底部のヘラ記号

仕上げナデは広い範囲におよび丁寧である。

蓋 稜線は概して鋭く、口縁部は高い。口縁端部は面を持つものが一般的である。器面調整は概して丁寧で、天井部外面に回転ヘラケズリかカキメを認め、稜線部以上の80%以上におよぶものが多い。天井部の内面は基本的に仕上げナデを行う。蓋A～Fの6類型に分類したが、各類型の差異は杯ほど明瞭ではない。したがって、杯Aと蓋Aは対応するものの、その他は杯の各類型と対応しない。

蓋A(17～21) 天井部は扁平で、口縁部はほぼ直立する。天井部外面の調整にカキメを用いるものがある(17・18)。また、天井部内面に横ナデを認めず、仕上げナデも明瞭に認めないが、平滑に仕上げるのが一般的である。

蓋B(22～27) 天井部はやや丸味を帯び、口縁部はほぼ直立する。天井部内面に横ナデを認めないが、仕上げナデを明瞭に残すものと残さないものがある。

蓋C(28) 口縁部から天井部にいたる境界は丸みを帯びる。口縁端部は他の類型がやや凹む面を持つのに対して平坦な面を持つ。

蓋D(29) 天井部は丸味を帯び、器高は高い。口縁部は八の字形に開く。全体に厚手で、稜線や口縁端部は丸味を帯びる。天井部内面に仕上げナデを認めず、横ナデが中央部にまでおよぶ。

蓋E(30・31) 天井部は丸味を帯び、稜線は鈍い。他の類型に比して、天井部のヘラケズリの範囲は狭い。

蓋F(32) 天井部は丸味を帯び、口縁部は低い。

有蓋高杯 有蓋高杯A～Cの3類型に分類できる。有蓋高杯Bと高杯蓋B、有蓋高杯Cと高杯蓋Cはセット関係にあるが、有蓋高杯Aと高杯蓋Aは対応しない。

有蓋高杯A(39) 杯部は高いたちあがりを持ち、口縁端部は面を持つ。長脚気味の脚部に楕円形の小スカシが3方にある。

有蓋高杯B(40～42) 口縁部は比較的 low、口縁端部は丸くおさめる。脚部は裾部が大きく広がり、スカシはない。

有蓋高杯C(43～45) 杯部は高いたちあがりを持ち、口縁端部は面を持つ。脚部は直線的に広がり、長方形スカシが4方にある。

無蓋高杯(46) 1点のみ出土した。脚部を欠損するが、長方形スカシを穿った痕跡が残る。比較的浅い杯部で、口縁端部は丸くおさめる。

高杯蓋 高杯蓋A～Cの3類型に分類した。

高杯蓋 A(38) 口縁部はほぼ直立し、天井部は扁平である。突帯状に小さく突出した稜線が特徴的である。天井部に楕状工具による列点文が綾杉状に連続して施される(写真7)。

高杯蓋 B(36・37) 口縁部は八の字形に広がり、天井部はやや丸味を帯びる。

高杯蓋 C(33～35) 口縁部は内湾気味に直立し、天井部は扁平である。



写真7 高杯蓋天井部の楕描列点文

甕(47～49) 底部破片が6個体分、口縁部破片が2個体分あるが、全体の形態を知り得るのは47のみである。47は口頸部は大きく広がり、口径は体部の最大径とほぼ同じである。体部は最大径が中位よりやや上にあり、底部は尖り気味の丸底である。6個体の底部破片は、例外なく内面に底部突き出し時の凹凸が残るが、外面はタタキ目を残すもの、不連続のケズリやナデで仕上げるものなど多様である。49は壺の可能性もある。

直口壺 口縁部の細片で、図化できない。端部は丸くおさめ、上・下を稜線で画した文様帯の中に波状文を施す。器面調整は横ナデを施す。

甕(50～54) 5個体ある。法量で小型・中型・大型に分類できる。口頸部の形態は多様であるが、口縁直下に一条の突帯を巡らす点で共通する。体部内面に同心円文のあて具痕を残すものは53のみで、他は無文のあて具を使用する。54の体部外面および底部内面の調整には不定方向・不連続のカキメを認める(図版15参照)。

(2) 土師器

壺(図11・写真8) 口縁端部をわずかに欠損するが、ほぼ完形である。頸部は直線的に立ち上がり、球形の体部である。体部内面に不定方向のケズリを認める。



写真8 土師器壺

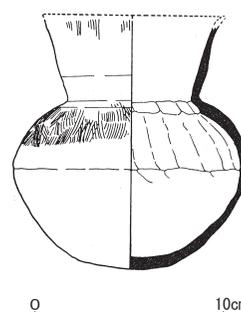


図11 土師器壺実測図(1:4)

3 鉄器類（図版 16～18・26・27）

東棺内から鉄剣・鉄刀・金具が、西棺内から鉄剣・鉄刀が出土した。これらは棺内への副葬品である。また、西棺上部を中心に鉄鏃多数と刀子、鉄鎌が出土した。この方は墳頂部での供献品で、須恵器同様に破片となったものが多い。

金具（1～11） 現地説明会資料^{註1}などでは「小札」として報告したものである。検討の結果、小札ではなく帯革などに取り付く金具と考え、この名称を用いた。

金具は11点ある。うち3点は全形をとどめる。長方形で、長さ5.5cm、幅2.5cm、すべて同法量である。厚さは1mm前後で極めて薄い。

金具の片面には黒褐色の光沢のある部分が遺存する。これが漆の痕跡なのか、金属の錆なのかは判定できない。光沢部は9・10では全面に、2・3・5・7では周縁部に認められる。またこの面にはわずかなふくらみがある。これは2・3・5で明瞭に認められる。以上から、本金具はこの面が外表面とみてよい。

裏面には布が付着する。布の残存状態は良好で、絹や植物繊維の重ねられた状態が顕微鏡観察で明らかとなった（付載参照）。

金具の側辺に沿って、上・中・下3箇所に対の鉤孔がある。鉤は鉄製で直径1.5mmほどある。1・3・6では鉤そのものが遺存するが、頭の形状や元の長さは不明である。鉤と鉤との間隔は、上列と中列間で2.2cm、中列と下列間で2.45cm、また短辺側で1.8cmを測る。

なお、金具の形状は現状では隅丸長方形を呈するが、これは鉤孔の錆が進行した結果、隅が欠け落ちたためである。

鉸具（12） 1点出土した。現存長2.5cm、幅2.1cmある。輪金と基部からなり、指金はない。輪金の大半は欠損する。基部に鉄鉤が

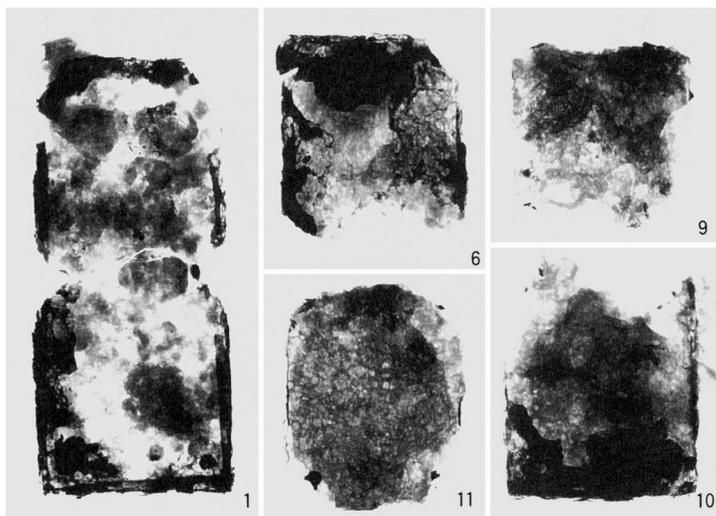


写真9 金具のX線写真

2本打たれ、ここに革帯が取り付けいていたと推定される。

刀子 (13～19) 6点ある。すべて破片で、完全なものはない。刃部の大きさからA・Bに分類した。

A(13～15) 刃部の幅が1.5cm前後のもので3点ある。13は刃部が完存し、長さ5.8cmを有する。関は刃と背の両方にある。14・15は刃部の破片である。

B(16・17) 刃部の幅が1.2cm前後のもので2点ある。17は刃部から茎にかけての破片である。関は刃と背の両方にあり、茎の外側には桜皮が残っている。16は刃部の破片である。

18・19は茎の破片で、Aに属するとみられる。

鉄鎌 (20) 1点のみ出土した。現状で長さ7.1cm、幅3.0cmあり、先端を欠損する。柄部の折り曲げはほぼ直角であるが、ここに木質は認められない。

鉄剣・鉄刀 (21～24) 東棺・西棺から鉄剣と鉄刀が1振ずつ、合計4点出土した。西棺から出土した鉄剣、鉄刀がともに長い。

東棺北側の鉄剣(21) 全長66cm、剣身52cm、茎14cmある。剣身の幅は関付近で4.3cmと最も広く、切先で3.5cmと狭くなる。断面の鑄は明瞭でない。茎幅も関付近が最も広く3.0cm、尻付近で2.2cmを有する。関は両側にあり直角に近い。茎尻から1.7cmと3.6cmの位置に目釘孔がある。前者は釘が遺存し、後者は孔のみである。表面に鞘の木質が残る(カラー図版2の8、図版19の7・8)。

東棺南側の鉄刀(22) 全長68.1cm、刀身57.6cm、茎10.5cmある。刀身は反りがない。幅は関付近で2.8cmと広く、切先付近で2.0cmと狭い。背の厚さは0.6cmである。関は緩やかで刃の側にある。茎は関付近で広く、次第に狭くなり尻にいたる。尻から4.3cmに目釘孔が遺存する。茎には柄の木質が残る。

西棺北側の鉄剣(23) 全長82.3cm、剣身69.0cm、茎13.3cmある。剣身の幅は関付近で4.0cmと最も広く、切先付近で2.2cmと狭くなる。断面は鑄が明瞭に観察される。関より段をもち茎にいたる。茎幅は関付近で1.5cmあり、わずかに狭くなりながら茎尻にいたる。茎に目釘孔はない。関は両側にあり直角に近い。鞘の木質は残りが良くない。

西棺北側の鉄刀(24) 全長92.7cm、刀身76.0cm、茎16.7cmあり、出土した4本の中で最も長大である。刀身は反りがない。幅は関付近で3.4cmと広く、切先付近で2.9cmとわずかに狭い。背の厚さは0.9cmある。関は刃の側にあり、強く湾曲する。茎は関付近で1.9cmあり、幅がほとんど変わらず尻にいたる。尻から4.2cmと12.3cmに目釘孔が一つ

ずつある。木質は遺存しない。

鉄鏃 (25～70) 主に西棺の上部から出土した。ほとんど破片状態であるが、29～33などは束ねられた状態で出土した。鉄鏃の種類はいわゆる長頸式鏃が主体をなし、他に平根式鏃が若干ある。

平根式鏃 (25～28) 4点ある。^{註2} 鏃身は大型の三角形で、28以外は腸袂を持つ。25は現存長7.6cm、幅3.5cmで両丸造り、厚さは0.5cm前後ある。26は切先を欠く。現存長5.0cm、幅4.1cmあり、両丸造りである。27は細長い鏃身で現存長6.3cm、幅2.1cmある。28は鏃身と判断したが片側面を欠損するので正確な形態は不明である。

長頸式鏃 (29～70) 小さな鏃身に長い筥被を持つ。鏃身の形状がわかるものは12点あり、1点(29)が片刃、残り11点が柳葉形を呈する。片刃(29)の鏃身は切先を欠損するが、現存で長3.7cm、幅0.9cmある。関は刃の方向にある。筥被は幅0.7cmあり、後述する柳葉形の筥被よりやや広い。先端より10.0cmの位置に段があり、茎にいたる。茎には木質が遺存する。

鏃身が柳葉形のもの(30～40)は、鏃身の長さ2.0～2.3cm、幅1.1cm前後、厚さは0.3cm前後ある。関は両方、また鑄は片面にあり、ともに比較的明瞭である。全体の形状がわかるものはないが、30では切先から茎まで9.7cmあり、全体で14cm前後あったと推定できる。

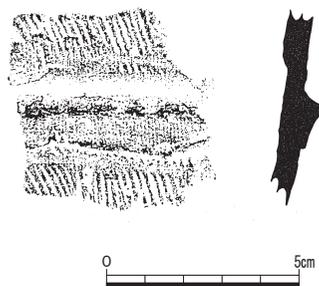
41～70に図示したものは筥被と茎の破片である。筥被の断面形は幅0.6cm、厚さ0.4cm前後で、鍛造のため中空となっている。60～62はこれらが2本以上がくつついたものを図示した。63～70は茎の破片で、外側には縦方向の木質とその上部に桜皮の巻かれた状態が残っている。また30の矢柄は桜皮の上に糸が巻かれた状態がみられる。これら長頸式鏃の筥被と矢柄の境界は、段や突起がなく明瞭でない。

なお、矢柄の断面についてはカラー図版2と付載を参照されたい。

4 その他の遺物 (図12～15、写真10)

埴輪 埴丘上から1片出土しているが、本古墳とは直接関係ない個体と判断される。外面は左上がりのハケ調整を施し、断面三角形の退化した突帯をナデ付ける。裏面はナデ調整を施すが、粘土帯を積み上げた痕跡が明瞭に残る。

砂粒を若干含み焼成は良好、鈍い黄橙色を呈する(図12)。 図12 埴輪拓影・実測図(1:2)



瓦類 調査区の各所から出土している。これらは7世紀後半、9世紀前半、12世紀の3時期のものを含む。

7世紀後半の瓦(図13)には、桶の枠板痕跡が明瞭に残る須恵質の平瓦が5点以上ある。図13の1は、凸面に斜格子タタキを施した平瓦である。側面・端面はヘラケズリ調整によって丁寧に仕上げる。胎土に砂粒を若干含み、灰色を呈する。同じタタキを施した平瓦はケン山瓦窯から出土している。図13の2は、凸面にV字を重ねたような特殊な文様のタタキを施した後に、細かい正格子タタキを重複させる平瓦である。胎土に砂粒を若干含み、オリーブ灰色を呈する。同じタタキ

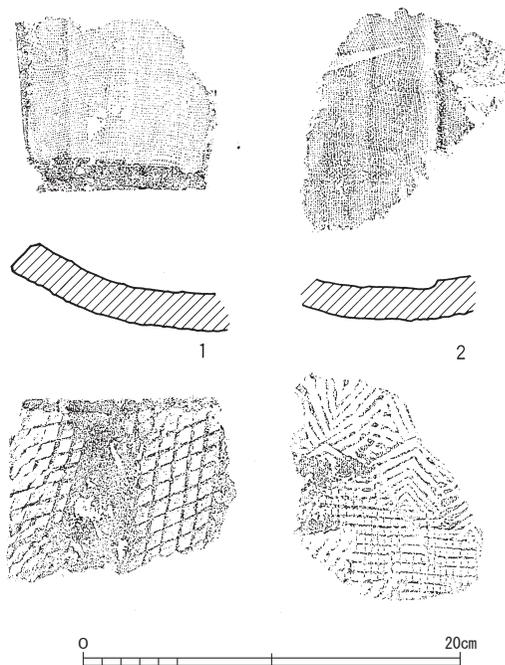


図13 平瓦拓影・実測図(1:4)

を持つ平瓦は、近辺の瓦窯跡や古代寺院遺跡ではまだ発見されていないが、北白川廃寺より同種格子タタキに鋸歯状タタキを重複させた平瓦が出土しており、関連が想定できる。^{註4}

9世紀前半の瓦は、緑釉の熨斗瓦片と鴿尾が出土している。熨斗瓦は凸面に縄タタキを施した軟質な瓦で、凸面側部から側面・凹面にかけて緑釉を施す。胎土は砂粒を少量含み、淡黄色を呈する。

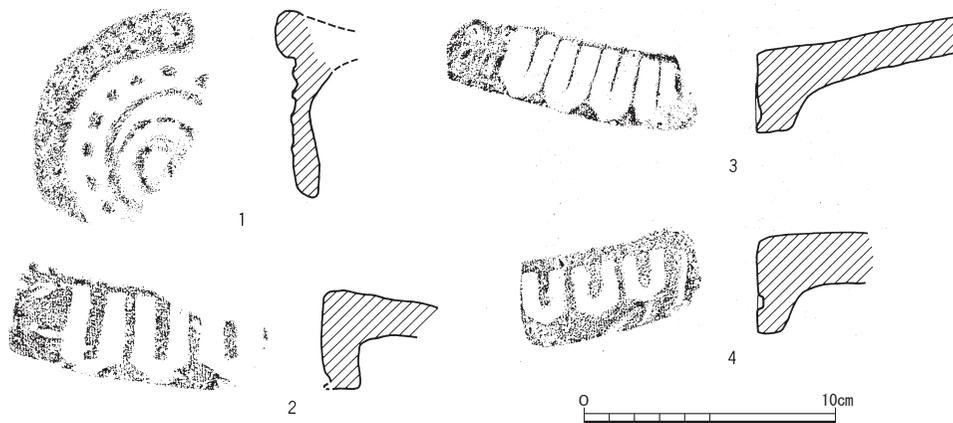


図14 軒丸瓦・軒平瓦拓影・実測図(1:3)

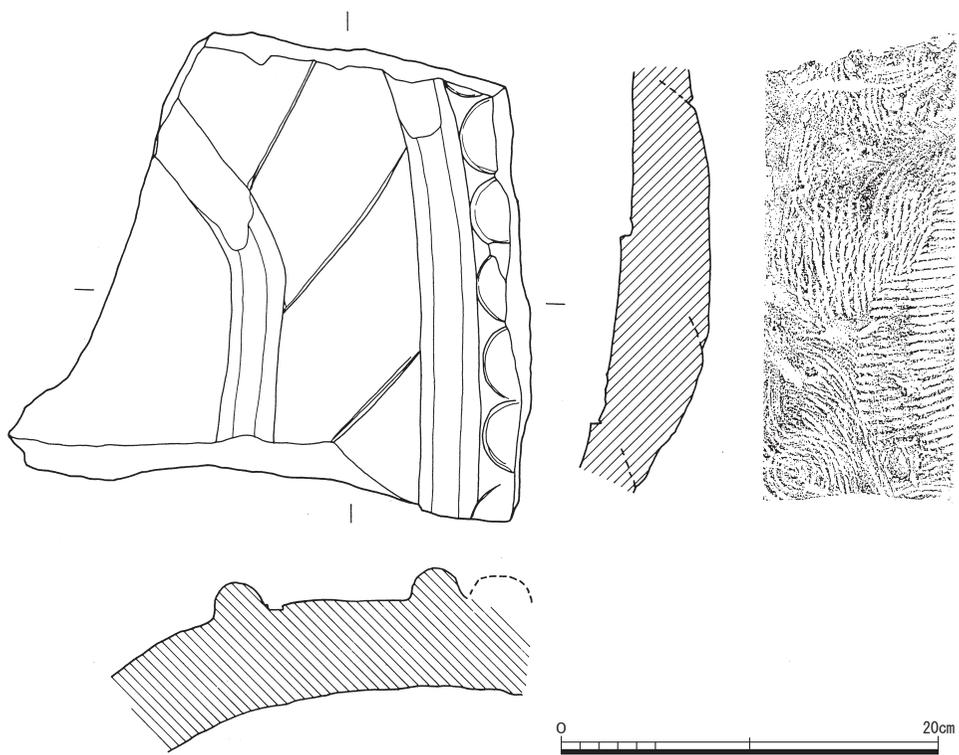


図15 鴟尾拓影・実測図(1:4)



写真10 鴟尾

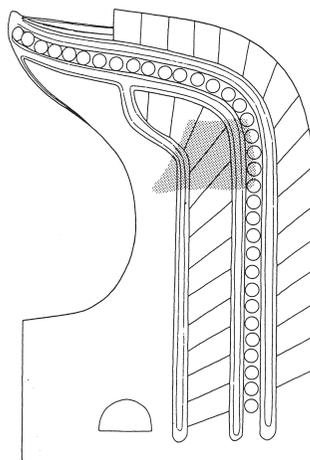


図16 鴟尾復原図(網が出土部分、『平安京跡発掘資料撰』(二)1986年より)

鴟尾（図15・写真10）は胴部側面の破片で、平安宮跡から出土する鴟尾と同形式のものである。断面が半円形の貼り付け突帯によって二重の縦帯を構成しており、内郭に逆段形をケズリ出し、外郭に連珠文を貼り付けるが、珠文はすべて剥離している。胴部はナデ調整によって丁寧に仕上げられており無文である。裏面には同心円文と平行文のタタキを施すが、粘土帯を積み上げた痕跡が若干残る。焼成は須恵質、砂粒や小石を若干含み、灰白色を呈する。西賀茂瓦窯跡で同形式のものが出土している^{註5}。

12世紀の瓦（図14）は最も多量に出土している。軒丸瓦では巴文、軒平瓦では剣頭文がある。丸・平瓦は縄タタキを施す。全体に焼成が甘く軟質である。図14の1は右方向に巻き込む二巴の軒丸瓦である。端部をケズって薄くした丸瓦を浅く差し込んで結合しており、瓦当裏面はオサエ調整による。砂粒を若干含み、鈍い黄橙色を呈する。図14の2～4は「半折り曲げ式」による剣頭文軒平瓦である。凸面はオサエ調整を施し、顎面を横方向にケズる。砂粒を若干含み、灰白色～灰色を呈する。

この他、窯体で使用されたと考えられる破片が2点出土している。

なお、本古墳は南ノ庄田瓦窯跡の推定範囲に位置している^{註7}。この瓦窯跡では3基の瓦窯が知られ、うち1基は古墳の北東上部に存在したとされるが、今回出土した瓦類もこの瓦窯からもたらされた可能性が高い。この瓦窯跡では今まで平安時代後期の瓦のみが報告されていたが、今回3時期の瓦が出土したことも新たな知見といえる。

註

- 1 『幡枝古墳群（2号墳）発掘調査現地説明会資料』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 2 この他、25と同形態のものが1点出土しているが、破損したため図示できなかった。
- 3 梶川敏夫他『ケン山窯跡群発掘調査概要報告』京都市埋蔵文化財調査センター 1985年
- 4 梶川敏夫「北白川廃寺塔跡第2次発掘調査概要」『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』北白川廃寺発掘調査団 1976年
- 5 梅原末治「西賀茂の窯址」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第15冊 京都府 昭和9年（1934）
- 6 木村捷三郎・梶川敏夫・渡辺和子『六勝寺跡 六盛西店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』六勝寺研究会 1977年
- 7 梅原末治「南庄田の一窯址」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第15冊 京都府 昭和9年（1934）ここでは道を挟んで2基の瓦窯が報告されている。道の東側の瓦窯は、本古墳調査の翌年に発掘調査を実施した。また本古墳の北東側に存在したとされる瓦窯は、昭和55年（1980）頃に梶川敏夫氏などが確認されたという。

第4章 ま と め

幡枝2号墳の調査は、京都市内では初めての完存する木棺直葬墳の調査となった。本市内では、横穴式石室を主体部とする古墳の調査は従来から行われてきたが、今回のような墳丘を有する木棺直葬墳の調査は例がない^{註1}。したがって、わずか1基の例ではあるが、山城地方における古墳時代の展開を理解する上で重要な古墳と考える。ここでは、墳丘・主体部・出土遺物の項目にしたがって、若干の問題点を整理しておきたい。

1 墳丘の構築方法

古墳の破壊・消滅が懸念されたため、墳丘についても十分な調査を行う方針で調査を進めた。その結果、東西・南北の両方向で良好な断面がみられ、墳丘構築についても具体的な資料が得られた。ここで、それを要約すれば、まず墳丘基底面の中央から盛り上げが始まり、その周囲に土を盛って平坦化する工程が都合3回ほど繰り返されて現状の高さに到達したというものである。その様子を図17に模式化して示した。

なぜこのような工程で墳丘が盛られるのであろうか。この点を、横穴式石室を主体部とする古墳との対比で考えることにする。同じ図17に掲げたものは、京都市西京区御陵に所在した大枝山14号墳^{註2}の墳丘断面図である。横穴式石室を持つ古墳であるから、封土は

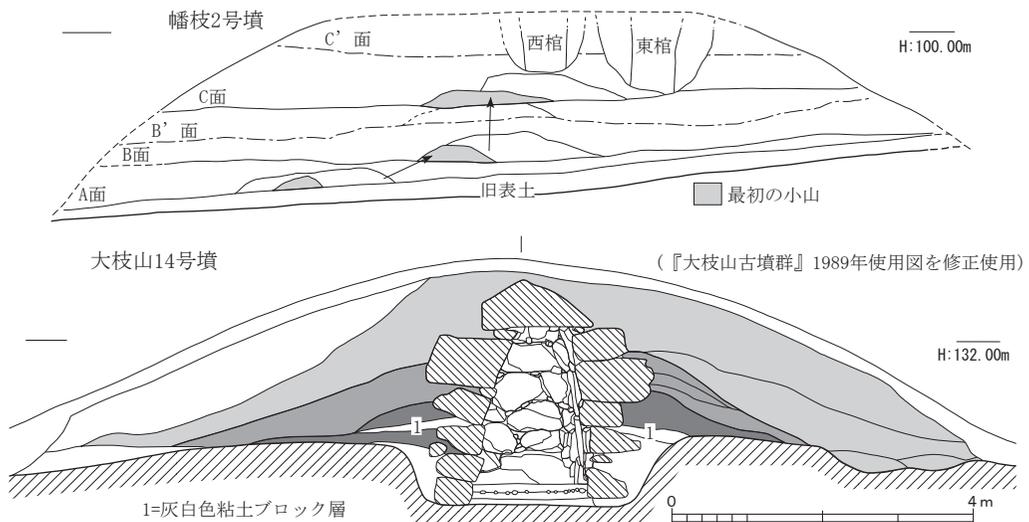


図17 墳丘断面の比較 (1:100)

当然石室の背後に盛られ、墳丘の断面形も中央が盛り上がった土饅頭形を呈する。ここで注目したいのは封土の層序である。大枝山14号墳の場合は、下部の封土ほど地表から深いところに堆積した粘土層、上部の封土ほど地表付近に堆積した泥土層が用いられる。ところが、今回調査した幡枝2号墳はちょうどこの逆で、下部の封土ほど旧地表の泥土層が、上部ほど基底部の下方に堆積した灰白色系統の粘土が盛られている。

このような差異は、以下のような構築手順によって生じたと理解できる。即ち、幡枝2号墳の場合は周溝の掘削時に生じた土をそのまま用いて墳丘構築が行われたため、最初の段階で旧地表付近の土が入り、順次下方に堆積した層が上に盛られていったこと、これに対し大枝山14号墳の場合は、周溝掘削時の土が周囲に仮置きされた状態で石室構築が始まったため、最初の段階で下方に堆積していた粘土層が入れられ、上部ほど旧地表に近い土に覆われて、前者とは逆転した層序を呈するようになったと推定できるのである。

次に注目したいのは、両者の墳丘断面形である。即ち、幡枝2号墳は全体に扁平で、墳頂部も平坦であるのに対し、大枝山14号墳の場合は中央の盛り上がった土饅頭に近い形状を呈する。ここで重要なことは墳頂平坦面の有無である。木棺直葬の古墳では埋葬が複数におよぶことや墳丘上での祭祀の存在から、墳頂部には広い平坦面が必要であったと考えられる。これに対して横穴式石室の古墳では、墳丘は単に石室を覆うだけのものとなり、墳頂の形状などは特に問題とならなかったであろう。このように考えるなら、幡枝2号墳にみられる墳丘構築方法は、墳頂部に広い平坦面を確保するという前代からの構築方法を順守した結果と理解できる。

なお、このような墳丘の構築方法は、本墳に限られるものではなく、一般の木棺直葬墳や大型古墳で通常知られるところとなっている。府下の例をあげると、八木町塚本古墳^{註3}や木津町西山塚古墳^{註4}では封土が4層に大別され、中央から外側に盛土する工程が復原されている。同様に、6世紀前半の木棺直葬墳である綾部市栗ヶ丘4・7・8・9号墳^{註5}、同市中山古墳^{註6}でも、低い方を平坦にして2～3層に盛られる状態が報告されており、同期の木棺直葬墳である長岡京市長法寺七ツ塚3・4・5・6号墳^{註7}でも同じような層序が確認されている。この他、同期の前方後円墳で横穴式石室を主体部に持つ向日市物集女車塚古墳の前方部^{註8}も、同様の層序が報告されている。

2 遺物の出土状態と墳丘祭祀

墳頂部では、東棺上で須恵器が、西棺上で鉄器が破片となって多数出土した。図18は

それらの出土状態を示したもので、東棺上には須恵器が、西棺上には鉄器の破片が集中する状態が理解できる。ともに細かく破砕された状態にあり、棺の真上に位置することや墳丘に刺さった状態のものが多いことが特徴として指摘できる。おそらく、埋葬が終了した時点でこれらを破砕するような祭祀が行われ、破片が主体部上に置かれた後に棺が陥

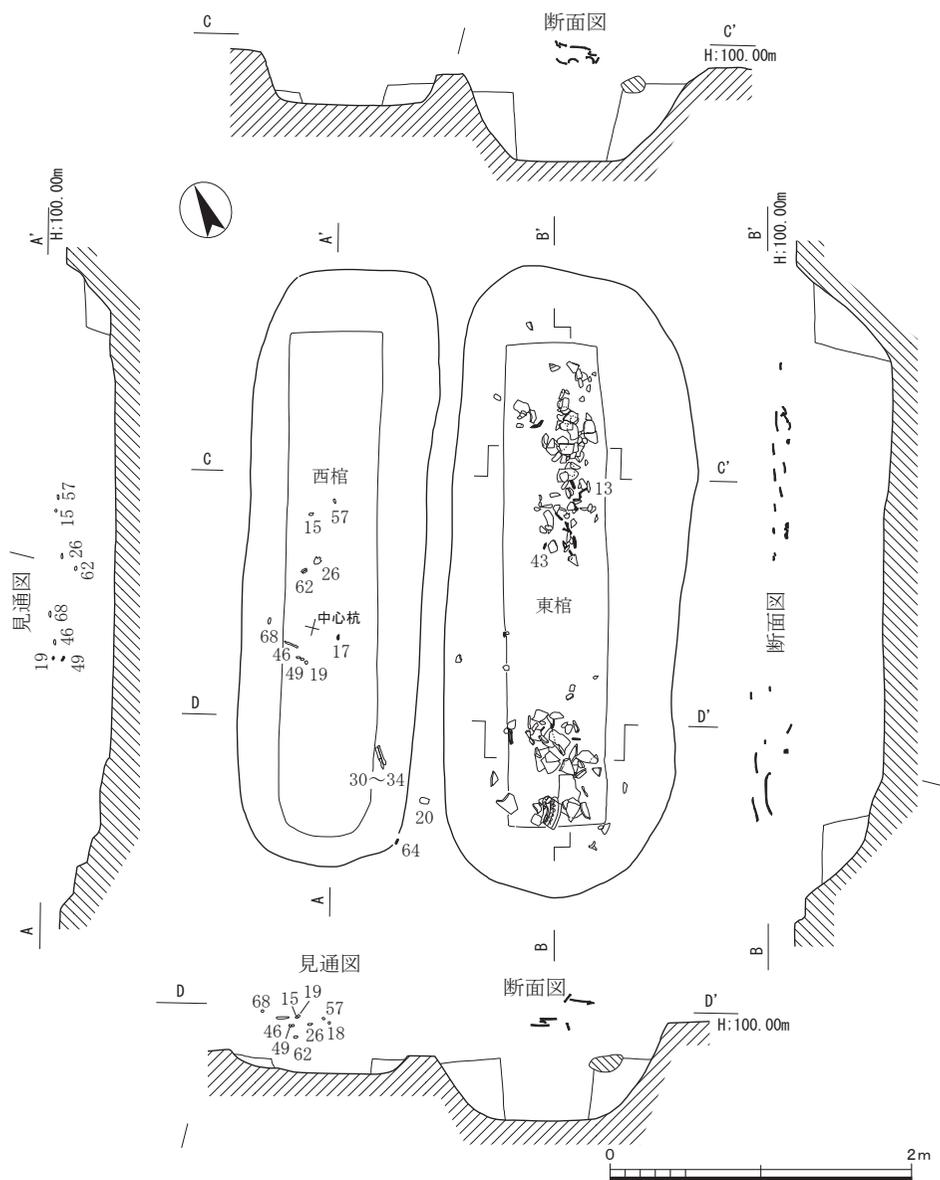


図 18 墳頂部での遺物出土状態（番号は鉄器）(1:50)

没し下方に落ち込んだためにこうした状態にいたったと考えられる。

須恵器は東棺の北端と南端でまとまって出土した。しかし、そのまとまりが何を示すのかは明確にできなかった。ただし、甕など大型品の接合状態を検討した結果、片寄って出土する傾向は認められず、多数出土した杯・蓋についても第3章2に示した型式分類に基づいて出土位置の検討を行ったが、この場合も特定のものが南北に片寄る傾向は認められなかった。このことから、須恵器は二群に分かれて出土したものの、置かれたのは同時であった可能性が高いと判断できる。以上は、須恵器資料の一括性と関連して重要であろう。

ところで、木棺直葬を主体部とする古墳では、通常棺内から須恵器が出土する例が多い。この場合、棺の小口や棺上、あるいは墓壇内からは完形品が数個出土することが多く、その開始時期は大阪陶邑窯^{註9}にいう TK23 型式から TK47 型式（5 世紀末から 6 世紀初頭）に相当するようである。これを横穴式石室の普及と関連させて、木棺直葬墳にも須恵器を副葬する風習が広まったとする説^{註10}もある。

木棺直葬の古墳では、この他に墳丘上や周溝内で須恵器が出土する例も多い。しかし、この場合は本例と同じく破片で出土することが多く、これらは墳丘での祭祀に用いられたと考えられてきた。こうした例は初期須恵器^{註11}が出土する古墳で特に顕著である。甲冑など豊富な遺物が出土したことで名高い大阪府藤井寺市野中古墳^{註12}では、墳頂部で多量の初期須恵器と土師器が破片の状態で出土しており、本古墳に類似した出土状態が知られる。京都府下の資料で同様の例を求めると、綾部市福垣北 3 号墳^{註13}（TK73 ～ 216 型式）、福知山市寺ノ段 3 号墳^{註14}（TK216 型式？）、弥栄町西小田 5 号墳^{註15}（TK208 型式）、綾部市高谷 6 号墳^{註16}（TK23 型式）、丹波町塩谷 4 号墳^{註17}（MT15 型式）、峰山町大耳尾 1 号墳^{註18}（MT15 型式）、弥栄町太田 4 号墳^{註19}（TK10 型式）、綾部市栗ヶ丘 12 号墳^{註20}（TK10 型式）、などが提示できる。これらは横穴式石室の出現以前から、MT15・TK10 型式という横穴式石室が普及し始める段階に属する古墳である。以後、木棺直葬墳は横穴式石室墳の増加によって減少する。横穴式石室の古墳になると墳丘上で須恵器が出土する例は乏しくなり、代わって石室前部付近で出土する傾向が多くなる。このことは、木棺直葬墳にみられた墳丘上の祭祀が場所を変えて継承された結果と考えられる。本例は横穴式石室採用以前の墳丘祭祀を知る貴重な具体例である。

3 出土遺物の特徴

須恵器 ①破片の状況 破片は概して細かく割れている。3cm 角ほどが多く、一つの

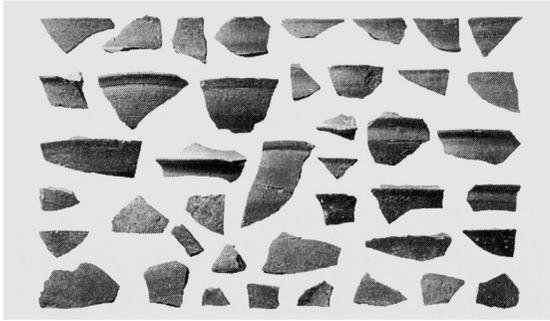


写真 11 須恵器破片（杯）

破片で全体の形を復原できるものは少ない。これらの破片はよく接合するが、まったく接合しない破片も少量ある。こうした状況は、葬送に伴って古墳にもたらされた一定量の土器が、墳丘上で人為的に破碎された結果と考えられる。さらに、一部のものには層状に細かく破碎している部分が認められ、これを器を打ち砕

く際の打撃点と考えることができる。

②回転ヘラケズリの方向 回転ヘラケズリの方向が観察可能な杯・蓋・有蓋高杯・高杯蓋・無蓋高杯の破片 68 点のうち、89.7% (61 点) が右回り（時計回り）、10.3% (7 点) が左回りであった。陶邑 T K 208 号窯のデータは、92.4% が右回り、7.6% が左回りで、近い値が示されている。^{註21}

③焼成の特徴 断面がセピア色を呈するものが多く、また部分的に還元不十分で土師器風の硬度と色調を呈するものがある。初期須恵器特有の焼成の不安定さを示しているといえる。

④器種の構成 杯 42 点・蓋 54 点・有蓋高杯 6 点・高杯蓋 7 点・無蓋高杯 1 点・甕 6 点・直口壺 1 点・甕 5 点がある。^{註22} 蓋杯、高杯などの小型器種が大半を占め、器台、壺など古墳に特有の大型器種を欠く。

⑤蓋杯・高杯の各類型 杯 A の (1・2) と蓋 A の (17・18)、杯 B の (4～8)、有蓋高杯 B (40～42) と高杯蓋 B (36・37)、有蓋高杯 C の (43～45) と高杯蓋 C (33～35) は、それぞれ形態・手法・焼成の特徴が酷似する一群を形成しており、各々が同一の生産単位から供給されたものであることは明らかである。すなわち、(イ) 古墳の造営や葬送に伴って、複数個がセットになって同じ生産地から直接供給されたことが想定でき、同時に、(ロ) 出土したすべての須恵器が同時に同じ生産地からもたらされたものではなく、異なる時期に数度にわたる供給があったか、同時に複数の生産地から供給された可能性を指摘できる。また、すべての個体が複数個からなる群を形成していないことから、(ハ) 一部日常生活で使用された容器が個別に古墳に持ち込まれ、葬送に使用された可能性も考えることができる。

⑥型式と年代 形態と手法の特徴から、大半が陶邑 TK208 型式^{註23}の範疇に含まれる。また、蓋 E と甕(47) は後続する TK23 型式に併行する時期まで下る可能性がある。田辺昭三氏によれば、TK208 型式は新古の 2 段階に分類でき、古段階を陶邑 ON46 号窯の出土遺物で代表させることができるという(以下 ON46 段階^{註24})。幡枝 2 号墳出土須恵器は、ON46 段階のものが多くを占め、TK208 型式の新段階(以下 TK208 段階)のものも少ないが存在する。杯 A・D、蓋 A、有蓋高杯 C、中型甕(52)などが TK208 段階に属する可能性がある。したがって、(イ)幡枝 2 号墳が築造されたのは ON46 段階であること、(ロ)以後、時期を違えて継続的に葬送・祭祀が TK23 型式の時期まで行われていたと考えることができる。

金具 東棺内から出土した金具は、当初、「小札」として報告したものである。しかし、本体に厚みがないこと、裏面に布が厚く付着すること、側辺に 3 対の鉤孔があることなどが判明し、小札でなく装飾用の金具と考えるのが妥当となった。この点を訂正しておく。

その用途について、ここでは帯金具、胡籐金具、冠帽に附属する金具について考える。

帯金具との関連では、神戸市中村 5 号墳から出土した帯金具が参考になる。この古墳は 6 世紀初頭に属する木棺直葬墳で、棺内から鉸具を含む 8 点の金具が出土している(図 19)。古墳の規模や内容、出土状態、裏面に布が付着すること、本体の幅や鉤孔の間隔などに共通性があり、中村 5 号墳出土のものを 2 枚一つなりにすれば、法量や鉤孔の間隔が本例に酷似する点は注意される^{註25}。しかし、中村 5 号墳では鉸具が揃って出土している上に形態も正方形に近く、また銀装で線刻を施す個体があるなどの特色を持ち、こうした点で比較するなら本例を帯金具とするには躊躇せざるをえない。

次に胡籐金具^{註27}について検討すると、この場合も中円板状金具や鉸具が伴わないこと、棺内で鉄鏝とともに出土していないことなどが否定的要素としてあげられる。ただし、方立と呼ばれる鏝容器の外に付けられていた金具となると、その可能性までは否定できないように思われる。しかし、そうした資料についても具体例を提示し得ないのが現状で、この場合も決め手を欠く。

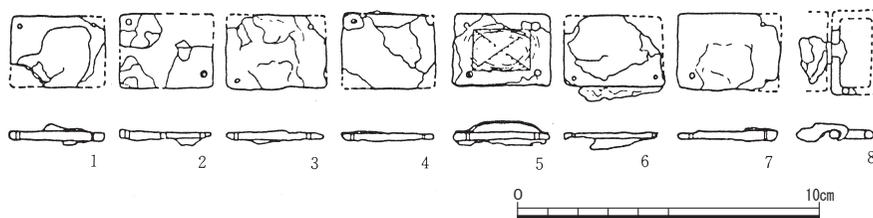


図 19 中村 5 号墳出土の帯金具(『中村古墳群発掘調査報告』1969 年を一部改変)(1:2.5)

最後の、冠帽に附属する金具については、本金具が頭部から胸部と推定される場所で出土していることや、金具裏面に絹を中心とした布が厚く付着することなどから推測したものである。古墳時代の冠帽は、後期に入るときらびやかな金・銀製品が多数知られるようになるが、布などの有機物で造られたものはほとんどわかっていないのが実状である。しかし、こうした非金属製の冠帽が存在していた可能性は十分考えられるので、^{註28} 本金具についても冠帽の外表面を装飾するような飾金具的な性格が考えられるのではなかろうか。本金具の性格は古墳被葬者の性格とも関係して極めて重要であるから、今後とも十分資料を検討して行きたい。

鉄鎌 鉄鎌は西棺上を中心に破片の状態出土した。これは東棺上での須恵器の出土状態と共通するもので、祭祀の際に同様の取り扱いがなされたことを示すものといえる。

本古墳から出土した鉄鎌は、長頸式鎌を中心に少数の平根式鎌で構成される。長頸式鎌の鎌身は、片刃のもの1点を除いて小さな柳葉形を呈し、片面に明瞭な鏽の付くものがすべてである。これに類似する資料として、近年報告書の刊行になった宇治市二子山古墳出土の鉄鎌^{註29}を取り上げる。

宇治二子山古墳は5世紀代に築かれた古墳2基からなり、先に築かれた北墳では東槨→中央槨→西槨の順に3つの主体部が築造されたという。その中で中央槨出土の鉄鎌は、平根式が多数を占め尖根式では柳葉形のものが1点(図20の1)あるのみである。次いで営まれた西槨では、尖根式として(2・3)がある。鎌身の形状は本例に共通するが、篋被

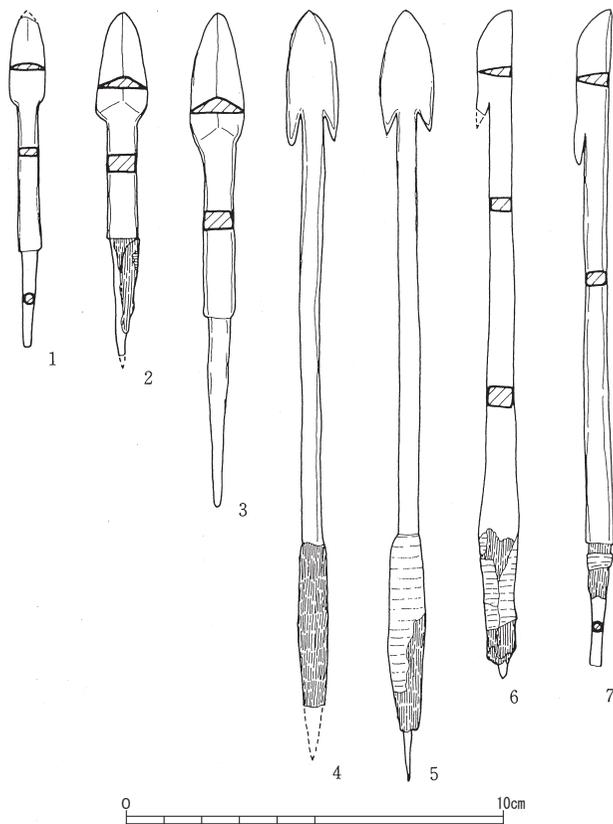


図20 宇治二子山古墳出土の鉄鎌(『宇治二子山古墳発掘調査報告』1991年より作成、1北墳中央部、2・3北墳西槨、4～7南墳主体部)(1:2)

が短いことや鍬身が大きい点に相違点がある。これが本例より古い特徴であることは、平根式が依然相半ばする鉄鍬の構成や他の副葬品からみても明らかである。一方、北墳より遅れて築造された二子山南墳でも多量の鉄鍬が出土している。ここでは、長頸式鍬を中心に少数の平根式鍬で構成されるが、この構成は本例に共通するものである。ただ、長頸式鍬では柳葉形(4・5)、片刃(6・7)に例外なく腸袂が付く点は相違点といえる。

以上、本古墳から出土した鉄鍬を宇治二子山古墳の北墳中央槨、西槨、南墳主体部出土の三者と比較した。その結果、鍬身の形態は5世紀中頃と考えられる前二者に類似するものの、長頸化した筥被の状態は5世紀後半とされる後者に共通することを指摘し、本出土例が後者の段階に位置することを明らかにした。このことは、5世紀後半という出土須恵器から得られた本古墳の年代観とも矛盾しない。

4 幡枝古墳群について

古墳群の立地 幡枝古墳群は合計17基の古墳で構成される。^{註30} 各々の古墳の立地をみると、平地には1号墳(幡枝古墳)と本2号墳の2基が築かれ、残りは南側の丘陵上に立地する。これを詳しくみると、図21の15・16の2基は丘陵の稜部・頂部にあるが、それ以外は丘陵の北側斜面に集中して築かれている。これは北側に古墳立地に適した緩斜面が存在したためであろう。

古墳群の構成 幡枝古墳群の中で内容の判明したものは、かつて銅鏡や剣、管玉が出土した1号墳と、木棺直葬墳である本2号墳の2基のみである。しかし、丘陵斜面に築かれた古墳1基(4)は、断面に石材が露出しており、横穴式石室を主体部に持つ古墳とみて誤りない。この他、5から8までの古墳は、低く平坦な墳丘からみて終末期に築造された方墳の可能性が高い。これは当研究所が1984年に右京区鳴滝音戸山町で実施した音戸山7・8号墳の発掘所見から指摘できることで、背後にコ字形に周溝が巡り、小型化した無袖の横穴式石室を主体部に持つ音戸山古墳群の例は参考となろう(図22)^{註31}。

以上の想定が正しいなら、幡枝古墳群では5世紀代に平地に築かれた1・2号墳と、丘陵北側斜面に築かれた群集墳14基、それに現状では年代や性格が不明な丘陵稜部・頂部の古墳2基で構成されることになる。そして群集墳については、丘陵の下方に築かれた古墳は6世紀末葉に属する横穴式石室を主体部とする円墳であること、これに対して上方に並ぶものは7世紀前葉に属する方墳の可能性が高いことなどを先に指摘したが、このようなあり方は先述した音戸山古墳群の場合と共通するものでもあり、群集墳の展開という点

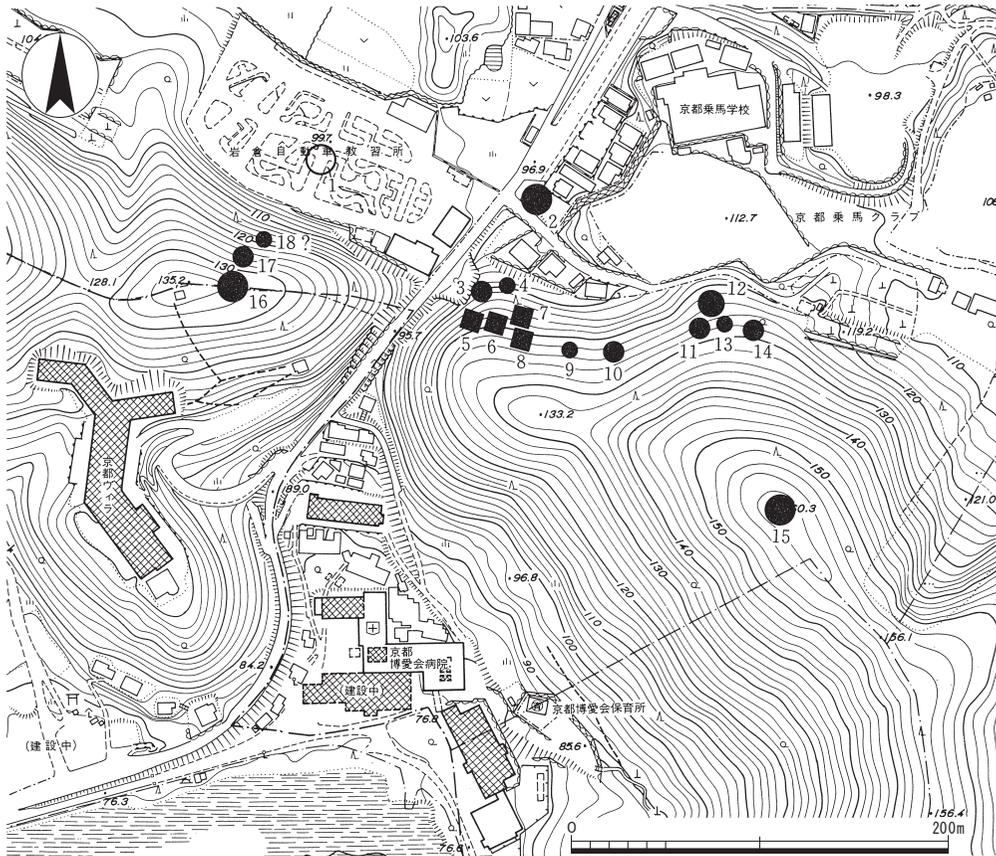


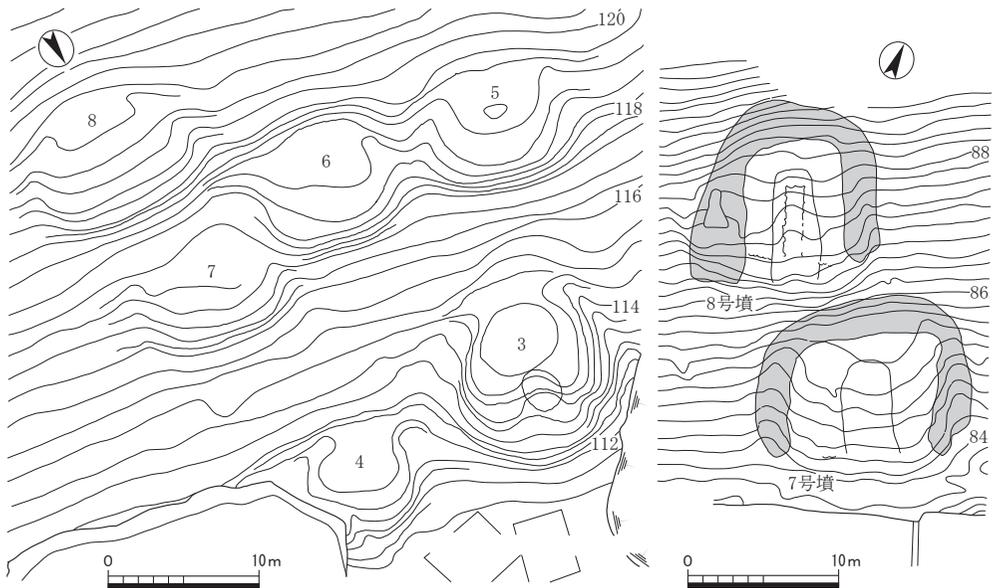
図 21 幡枝古墳群分布図 (1:4,000)

では一般的であった点が指摘できる。

以上、幡枝古墳群の実態を少ない資料から推察した。それによって5世紀前半に1号墳、5世紀後半に本2号墳が築造された後には100年以上の隔りがあり、6世紀末葉になって横穴式石室を持つ古墳が築かれ、7世紀前葉まで順次築造が続く様子を見ることができた。重要なことは、一様に幡枝古墳群として把握されてきた本古墳群が、実は5世紀代の古墳2基と6世紀末葉以降の群集墳多数で構成される点を明らかにした点である。こうした視点は古墳群の実態を考える上で今後参考になる。

5 古墳の被葬者とその性格

被葬者の居住域 岩倉盆地の西側を画す丘陵上には古墳が多数築かれている。これらの古墳は、大半が古墳時代後期に築かれたいわゆる群集墳と推定されるものであるが、中に



幡枝古墳群(『第38とれんち』1986年を一部改変、番号は図21に同じ)

音戸山古墳群(『御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群発掘調査概報』昭和60年度を一部改変)

図 22 墳丘測量図の比較 (1:500)

は本山神明1号墳のように、T字形の特異な横穴式石室を持つ古墳もあり、古墳群の形成時期を考える上での興味深い資料となっている。

これらの古墳を築いた被葬者達は、どこに居住していたのだろうか。岩倉盆地では現在、岩倉忠在地遺跡の存在が知られるものの、確実な住居跡はまだ検出されておらず、こうした状況からすると、盆地内よりも南側の京都市街地側に居住域を求めた方が自然と思われる。この場合、居住域と墓域が少し隔離した状況を想定せねばならないが、桂川右岸の地域では向日丘陵の背後に福西古墳群や大枝山古墳群が築かれる例もあり、これらを参考にすることも可能であろう。^{註32}

そこで居住域を考えた場合、具体的な候補にあげられる遺跡の一つに植物園北遺跡がある。この遺跡は昭和54年(1979)から昭和56年(1981)にかけて公共下水道工事に伴う立会調査で発見された大規模な集落遺跡^{註33}で、その後数回にわたる発掘調査で堅穴住居など多数の遺構が確認されている^{註34}。遺跡の規模は東西2.1km、南北0.9kmと推定され、存続時期は弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代後期を中心に、古くは縄文・弥生時代、下つては奈良・平安の各時代にわたる遺構・遺物が確認されている。本古墳築造期の遺構が明確でない点に問題を残すが、規模や内容などから考えて遺構の存在する可能性が高い。

今のところ岩倉盆地に築かれた古墳との関係では最も蓋然性の高い集落遺跡といえるだろう。

古墳被葬者の性格 幡枝2号墳が築かれた5世紀後半の時期は、畿内の中央政権が地方の各首長を統制化に置くことで、畿内を頂点とする政治・社会体制が一段と整備された時期にあたる。これは全国的に前方後円墳の規模が縮小することに加えて、大型円墳や帆立貝式古墳が盛行すること、さらにまた『記・紀』に記載された雄略天皇の活躍する時期に一致することから想定されることである。事実、埼玉県稲荷山古墳や熊本県江田船山古墳では、雄略天皇を表す「註35獲加多支鹵大王」の象嵌銘を持つ鉄剣・鉄刀が出土しており、当時の中央と地方の情勢を知る貴重な資料となっている。

山城地方ではこの時期、久津川古墳群の築造が続けられる。久津川古墳群は山城地方を統括した首長の墳墓群であるが、その築造を契機に山城の各地に築かれた首長墓が一様に衰退するという中央と地方の縮小した関係が指摘されている。註36 幡枝1・2号墳の築かれた京都盆地北部では、首長系譜に属する古墳そのものが明らかでないため前後の様相は知り得ない。それにしても1・2号墳の被葬者が当時の社会情勢と無関係でありえたはずはない。当然、上述した規制の枠内で古墳築造を余儀なくされたと考えるのが妥当であろう。註37

次に、幡枝2号墳の被葬者を考える一つとして、近傍に築かれた幡枝1号墳との関係をみておこう。幡枝1号墳については主体部が粘土槨とみられること、朱が用いられていたこと、銅鏡、管玉、鉄剣が出土していることなどが知られる程度で、註38 詳しい内容は判明していない。しかし、出土品の一つである銅鏡が、神像・獣像文様の退化した仿製四獣鏡でありながら、外区に「夫火竟」と線刻された銘文を持つ特異な鏡であること、同じ「火竟」銘を持つ神獣鏡が宮崎県持田古墳群から1面出土しており、両者の字体や鏡背の文様構成が酷似することは早くに指摘されたことである。註39 1号墳の被葬者が、こうした特色ある銅鏡を保持し得たのは、中央政権と密接に結び付くことによって可能であったと考えられるので、1号墳の近傍で遅れて築かれた本2号墳の被葬者も、当然1号墳被葬者に与えられた権威を引き継ぐ形で存在した人物を想定して誤りなからう。

一方、5世紀後半に築かれた古墳は、鉄器の多量埋納に代表されるように武器・武具を豊富に副葬するものが多い。しかし本古墳の場合は、2棺とも鉄剣、鉄刀を1振りずつ納める程度で、東棺内には金具を持ち、さらに当時としてはなお貴重品であった須恵器を墳頂で破砕するなど、二・三の特色が指摘できる。小規模な墳丘、副葬品の内容、さらには主体部が簡便な箱型木棺を直葬することなどを考え合わせるなら、古墳築造に際しては何

らかの規制を受けたとみるのが妥当であろう。しかし、なおこの場合でも、小規模ながら円墳の墳形を有すること、墳丘には葺石を丁寧に施すことなどの特色は、本古墳の被葬者が地域首長の枝葉に連なる身分を示し得た点とも評価できる。銅鏡を保持した1号墳被葬者とのつながりからいえば、こうした点に前者の権威を引き継いだ被葬者の姿が想定できるのではなかろうか。

註

- 1 ただし、墳丘の削平された古墳や土壙墓が近年京都市内でも調査されている。
①京都大学教養部構内A P 22 区では方墳数基と土壙墓（SK620、6世紀初頭）が検出されている（五十川伸矢・飛野博文「京都大学教養部構内AP22 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和57年度 京都大学埋蔵文化財研究センター 1984年）
②鳥羽離宮跡の第90次調査で土壙墓が10基検出され、付近には方墳とみられるものも調査されている。（長宗繁一・前田義明「第90次調査」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985年）
- 2 田辺昭三・上村和直・丸川義広『大枝山古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第8冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 3 引原茂治「塚本古墳発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第41冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991年
- 4 伊賀高弘「京都府木津町西山塚古墳の調査」『京都府埋蔵文化財情報』第46号 1992年
- 5 引原茂治『栗ヶ丘古墳群』京都府遺跡調査報告書 第13冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989年
- 6 中村孝行「中山古墳発掘調査概報」『京都府綾部市文化財調査報告』第10集 綾部市教育委員会 1983年
- 7 山本輝雄『長法寺七ツ塚古墳群』長岡京市文化財調査報告書 第21冊 長岡京市教育委員会 1988年
- 8 秋山浩三・山中 章他『物集女車塚』向日市埋蔵文化財調査報告書 第23集 向日市教育委員会 1988年
- 9 田辺昭三『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ 1966年
- 10 藤原 学「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」『末永先生米壽記念獻呈論文集』奈良明新社 1985年
- 11 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
- 12 北野耕平『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室報告2 1976年
P34に、「主体部の発掘に先だって3月16日より墳頂部の調査を開始したところ、表土の直下に

須恵質土器、および土師器の破片が埴輪片と共存して認められた。当初これらの遺物が主体部といかなる関連を持つかについて判断を下すことができなかつたので、出土した土器片の位置をすべて10分の1の分布図に記入することとした。……中略……このようにして記録し得た須恵質土器の数は約6800片、土師器の数は2000片、その他埴輪片などを含む多数に達したのである。いまこの分布図を通観して、土器の分布が埴頂部の中央において最も濃密で周辺にいたるにしたがってその量を減じ、その後確かめた内部構造における遺物の配列とも深い関係を有することを明らかにした……。またP137に、「……埴頂部から出土したこの種の土器片は6800片に達した。しかもこれとは別に内部の主体施設に一括した副葬品として埋納された土器群があって、埴頂部の中央におそらく露呈した状態で並べられたものとの間に、明らかに取り扱いの差が認められるものがある」とある。（下線は筆者による）

- 13 石井清司「福垣北古墳群」『京都府遺跡調査概報』第31冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988年 P63では、「……棺の上面から須恵器壺(甗?)・高杯が破砕した状態であり、」とある。
- 14 崎山正人『駅南地区発掘調査報告書』福知山市文化財調査報告書 第16集 福知山市教育委員会 1989年 P14に、「遺物は、墓壇埋土上層で須恵器取手付碗・土師器高杯を検出し……」とあり、P90に出土状態の図がある。
- 15 三好博喜「西小田古墳群発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第24冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年 P124に、「墓壇検出面では、ほぼ中央から須恵器の甗(……中略……)が大小セットで出土した。この甗のセットは、径0.5m・深さ0.2mの土壇内に、正位の状態併置されていた。」とあり、P123に出土状態図がある。
- 16 『高谷古墳群発掘調査概要』綾部市文化財調査報告書1 綾部市教育委員会 1973年 P26に、「……棺の上に二群の土器群および鉄器があった。南群は須恵器高杯10個、同蓋8個、土師器直口壺1個が置かれており、また北群では須恵器甗2個、杯蓋1個、鉄鏃2本が置かれていた。」とあり、本例に類似した出土状態が記されている。
- 17 伊野近富「塩谷古墳群平成元年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第38冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990年 P16に、「頂部に須恵器壺片のあることが判明した。その後、掘削を進めて行くにしたがって、この遺物が棺上(あるいは墓壇上)に置かれていることも判明した。」とあり、P18に平面図がある。
- 18 安田 章「峰山町大耳尾古墳群の発掘調査」『第63回研修会資料 平成2年度の成果から』京都府教育委員会・財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991年 木棺直葬の棺上部で須恵器や土師器が破片となって出土したという。安田氏の御教示による。
- 19 増田孝彦・石崎善久「太田・下後古墳群」『京都府遺跡調査概報』第39冊 財団法人京都府埋蔵

文化財調査研究センター 1990年 P11に、「棺外遺物として墓壇検出面で杯身1点、広口壺1点、短頸壺1点、甕1点、甕2点が出土した（……中略……）。層位的に墓壇埋土出土の遺物と区別することはできなかったが、出土状況・接合関係などからみて、墓壇を埋め戻した後に供献された土器群であると考え。」とあり、P10～11には出土状態の図が掲載されている。

20 引原茂治 5に同じ。P30に、「主体部ほぼ中央、棺底から0.8～1m上方の墓壇埋土中から、大形の須恵器甕が大破した状態で出土した。これに混じって、須恵器杯蓋・蓋・高杯・甕各1点が割れた状態で出土した。これらの須恵器は、棺埋納後に主体部上に供献され、割られたものとみられる。」とある。

21 田辺昭三 9に同じ。

22 甕は底部数、他の器形は口縁部数で集計した。

23 田辺昭三 9に同じ。

24 田辺昭三「初期須恵器について」『小林行雄博士古稀記念論文集 考古学論考』平凡社 1982年所収 ここで田辺氏は、0N46号窯の製品の特徴が基本的にはTK208号窯のそれと共通すると指摘しながらも、各器種に「定型化」以前の要素が残存することなどを根拠に、TK208型式の前半段階に位置付けられている。さらに、0N46段階の須恵器の特徴として、以下の諸点を列挙されている。

①杯蓋の底部・天井部のヘラケズリの範囲がほぼ全面におよぶほど広く、ややフラットな感じになり、各端部が極めて鋭角的に調整されていること。

②杯蓋に脚部を付けたタイプの無蓋高杯が残ること。

③耳状把手を有する無蓋高杯は、TK208型式の後半段階では定型化し、櫛描波状文帯上に一方のみつけるが、0N46段階では例外が多いこと。

④壺・甕の口縁部は、TK73型式以来の単に丸くおさめ、端部近くに一条の突帯を巡らすものが確実に残ること。

25 櫃本誠一編『中村古墳群発掘調査報告』兵庫県教育委員会 1969年 中村5号墳は神戸市垂水区中村の標高72.27mの丘陵頂上部に位置する。直径14mの円墳で南南東に造り出しを有し、主体部は割竹形木棺の直葬が2基ある。帯金具は第1主体部の棺内南西端で出土し、「埋葬主体者の腰に装着していたとは考え難く遺骸頭部と南東小口板の間に置かれていたと考えざるを得ない。」と記されている。帯金具は鈔板7個と鉸具1個で構成され、鈔板の1つは鉄地銀張りで突出部があり線刻が施される。他は無文で絹帛に漆が塗られる。第1主体部からは他に直刀1振、鉄鎌10本、不明鉄製品1個が出土。また墳丘裾からはTK47型式に属する須恵器が破碎された状態で出土するなど、本古墳に共通する部分が多い。

26 財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センターの内山敏行氏より御教示をいただいた。

- 27 胡籥に関しては、以下で全国的な集成がなされているが、本例に類似するものは見出せなかったことを付記しておく。
- ①早乙女雅博「古代東アジアの盛矢具」『東京国立博物館紀要』第23号 1987年
- ②田中新史「古墳出土の胡籥・鞞金具」『井上コレクション弥生・古墳時代資料図録』言叢社 1988年
- 28 静岡県袋井市の高尾団子塚9号墳では、革に黒漆を塗った帽が金製三角飾り板や飾り金具ともに出土している。帽は脂肪酸分析で革製と推定された。飾り板は金板を三角形に折り曲げ、糸か細い針金で帽と結ばれたとされる。飾り金具は3片あり、それぞれ5×3mmと小型で鋳を1つ持つ。これらは帽の縁を装飾した金具と考えられる。団子塚9号墳は、直径20m、高さ3mの円墳で、古墳群中の盟主的な古墳である。主体部は木棺直葬で、長さ2.2m、幅0.7mあり、棺内からは、遺骸（頭骨・顎骨）、歯、耳環、玉類、腕飾り、武器類、武具、馬具が良好な形で出土した。挂甲で、革を漆で固めた有機質小孔が金属性小札と併用される状態を明らかにした点も特筆される。時期は、棺外から出土した須恵器より6世紀前半の築造とされる。
- 以上は、①永井義博「高尾団子塚9号墳出土の帽と金製三角飾り板」『古代文化』第43巻 第3号 財団法人古代学協会 1991年、②辰巳和弘・永井義博・塚本敏夫・杉本和江「鉄小札・革小札を併用する挂甲 —静岡県袋井市団子塚9号墳出土例—」『古代文化』第45巻 第10号 1993年を参照した。なお、永井氏からは御教示をいただいた。
- 29 杉本 宏編『宇治二子山古墳発掘調査報告』宇治市文化財調査報告書 第2冊 宇治市教育委員会 1991年
- 30 幡枝古墳群は、『京都府遺跡地図』（1972）では4基の古墳で構成され、『京都市遺跡地図』（1980）でも同じく4基の古墳からなっていた。ところが1986年に改訂された『京都市遺跡地図台帳』では17基と古墳数が増加している。これは航空写真に写っていた古墳状の高まりを現地で古墳と確認したため増加したという。以上は梶川敏夫氏の御教示による。ただし、1971年に発行された『京都市本山・幡枝地区遺跡分布調査の記録』（同志社大学文化史学専攻生・幡枝地区遺跡研究グループ）では、現状に近い古墳14基が明示されているので、すでにその頃から古墳群の内容は確認されていたものと思われる。
- 31 北田栄造・丸川義広『御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群発掘調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1986年
- 32 田辺昭三・上村和直・丸川義広 2に同じ。P66・83を参照。
- 33 『史料京都の歴史』2 考古 平凡社 1983年
- 34 植物園北遺跡における発掘調査は平成5年（1993）5月現在で10次にわたる。うち弥生時代から古墳時代の竪穴住居が検出された調査は以下の6回である。
- ①第3次調査で、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居4棟。辻 裕司・木下保明『植物園

北遺跡発掘調査概報』昭和 59 年度 京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985 年

②第 5 次調査で、古墳時代前期の堅穴住居 2 棟と後期の堅穴住居 9 棟。高 正龍

『植物園北遺跡発掘調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990 年

③第 7 次調査で、古墳時代前期の堅穴住居 9 棟。高橋 潔「北区上賀茂松本町の調査」『第 47 回京都市考古資料館文化財講座資料』京都市考古資料館 1991 年

④第 8 次調査で、弥生時代後期から古墳時代後期までの堅穴住居 11 棟。長谷川行孝『ノートルダム女子大学構内遺跡発掘調査報告 植物園北遺跡』ノートルダム女子大学 1991 年

⑤第 9 次調査で、古墳時代末期の堅穴住居 3 棟。『「植物園北遺跡」現地説明会資料』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1992 年

⑥第 10 次調査で、弥生時代後期の堅穴住居 3 棟ないし 4 棟。(1992 年 9 月に当研究所が調査、未報告)

35 『古事記』では「大長谷若建命」、『日本書紀』では「大泊瀬幼武」の字をあてる。『宋書』倭国伝にある有名な上表文(478 年)を送った倭五王の一人「武」は雄略天皇が「幼武」であることで比定される根拠となっている。したがって、埼玉稲荷山古墳出土の象嵌銘にある「辛亥年七月中記」も西暦 471 年とする説が有力である。

36 ①和田晴吾「南山城の古墳 ―その概要と現状―」『京都地域研究』Vol.4 立命館大学人文科学研究 1988 年

37 ②杉本 宏「宇治二子山古墳とその周辺」28 に同じ。

このような規制の影響は一方で集落遺跡の動向に色濃く表れている。山城地方の北部では、山科区中臣遺跡、伏見区鳥羽遺跡、北区植物園北遺跡など古墳時代前期と後期に属する集落遺跡が多数知られるのに対し、古墳時代中期にあたる 5 世紀代の集落遺跡は非常に希な存在となっているが、これは大和・河内・和泉の畿内中心部で巨大古墳の築造が続けられたため住民が古墳築造に徴用され、これが原因して一時的に人口密度が希薄になるような現象が起こったとは考えられはしまいか。

38 高橋美久二「京都市左京区幡枝古墳とその出土品」『京都考古』第 44 号 1987 年

39 榎本杜人「仿製鏡の火鏡銘について(遺稿)」『考古学雑誌』第 56 巻 第 3 号 1971 年

別表 土器観察表

| 器形 | 番号 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|----|-----------------|---|---|--|
| 杯 | 杯 A 1 3 | <ul style="list-style-type: none"> * たちあがりはわずかに内傾し、高い。端部はややくぼむ面をもつ。 * 受部は外上方へのび、比較的短い。 * 底部は基本的に扁平だが、やや丸味をおびるもの(1)もある。 * 口径は 11.0(3) ~ 11.5cm(2) がある。 | <ul style="list-style-type: none"> * 受部以下の 80%以上を回転ヘラケズリ調整する。ヘラケズリの方向は時計まわり。 * ヘラケズリ部分と底部内面以外は横ナデを行う。 * 底部内面に横ナデを認めず、仕上げナデも明瞭に認めないが、平滑に仕上げる。同心円文あるいは無文のあて具の圧痕をナデ消しているものがある(1)。 | <ul style="list-style-type: none"> * 蓋 A とセット関係にある。 * (1・2) と 蓋 (17・18)、(3) と 蓋 (20) は細部の形態・手法・焼成等で酷似する。 * (3) は断面セピア色を呈する。 |
| | 杯 B 4 9 | <ul style="list-style-type: none"> * たちあがりはわずかに内傾し、杯 A に比べて低い。端部はややくぼむ面をもち、内側への傾斜は杯 A より大きい。 * 受部は外上方にのびるか、ほぼ水平にひろがる。 * 底部は扁平である。 * 口径は 10.8(5) ~ 11.8cm(9) がある。 | <ul style="list-style-type: none"> * 受部以下の 80%以上を回転ヘラケズリ調整する。ヘラケズリの方向は時計まわり。受部直下のヘラケズリ部分の上からさらに横ナデを行うもの(9)がある。 * ヘラケズリ部分と底部内面以外は横ナデを行う。 * 底部内面は広範囲にわたって仕上げナデ調整を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> * (9) をのぞくすべてが細部の形態・手法・焼成が酷似する。 * (7・8・9) は断面セピア色を呈する。 |
| | 杯 C 10 13 | <ul style="list-style-type: none"> * たちあがりはわずかに内傾し、高い。端部は面をもつが、丸味をおびる。段をもつもの(10・11)もある。 * 受部は外上方にのびるか、あるいは水平にひろがる。 * 底部は丸味をおびる。 * 口径は 10.0(10) ~ 10.7 cm(12) がある。 | <ul style="list-style-type: none"> * 受部以下の 80%以上を回転ヘラケズリ調整する。ヘラケズリの方向は時計まわり。 * ヘラケズリ部分と底部内面以外は横ナデを行う。 * 底部内面は仕上げナデ調整を行う。ナデの範囲は杯 B に比べて狭い。 | <ul style="list-style-type: none"> * (10) と (11) は細部の形態・手法・焼成が酷似する。また蓋(23)はこれに組み合わせるものである。 * (11・12・13) は断面セピア色を呈する。 |
| | 杯 D 14 15 | <ul style="list-style-type: none"> * たちあがりはわずかに内傾し、直線的にのび高い。端部はややくぼむ面をもつ。 * 受部は外上方にのびる。 * 底部は丸味をおびる。 * 口径は (14) が 10.3cm、(15) が 10.2cm がある。 | <ul style="list-style-type: none"> * 回転ヘラケズリ調整の範囲は、受部以下の 70 ~ 80%にとどまる。ヘラケズリの方向は(14)が時計まわりで(15)が逆まわり。 * ヘラケズリ部分以外は横ナデを行う。底部内面に仕上げナデ調整を認めない。 | <ul style="list-style-type: none"> * (15) と 蓋 (25) は細部の形態・手法・焼成が酷似する。また、図示していないが、(14) と組み合わせる蓋も小片ながら存在する。 * (14) の底部外面にはヘラ記号「一」が焼成前に陰刻される。 |
| | 杯 E 16 | <ul style="list-style-type: none"> * たちあがりはわずかに内傾し、低い。端部はややくぼむ面をもつ。 * 受部は外上方にのびる。 * 底部は丸味をおびる。口径は 10.4cm がある。 | <ul style="list-style-type: none"> * 受部以下の 80%以上を回転ヘラケズリ調整する。ヘラケズリの方向は時計まわり。 * ヘラケズリ部分と底部内面以外は横ナデを行う。 * 底部内面は広範囲にわたり仕上げナデ調整を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> * 受部以下はやや軟質で灰黄色を呈する。 * 断面はセピア色を呈する。 * 胎土は際立って精良である。 |

| 器形 | 番号 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|----|----------------------|--|---|--|
| 蓋 | 蓋 A 17 ~ 21 | <ul style="list-style-type: none"> * 口縁部は高く、稜線からほぼ垂下へのびる。端部はややくぼむ面をもつ。丸味をおびた面をもつもの(21)もある。 * 口径は12.3cm(21)～13.2cm(17・19)ある。 | <ul style="list-style-type: none"> * (17・18・19)は天井部内面に横ナデを認めず、仕上げナデも明瞭に認めないが平滑に仕上げる。(21)は仕上げナデ調整を行う。 * ヘラケズリ部分と天井部内面以外は横ナデを行う。 | |
| | 蓋 B 22 ~ 27 | <ul style="list-style-type: none"> * 天井部はやや丸味をおびる。 * 稜線は斜め下方に鋭く突出する。斜め上方につまみあげたようなもの(27)もある。 * 口縁部は高く、稜線からほぼ垂下へのびる。端部はややくぼむ面をもつ。段をもつもの(23)もある。 * 口径は11.9(23)～13.0cm(22)ある。 | <ul style="list-style-type: none"> * 天井部の80%以上を回転ヘラケズリ調整する。また、受部直上部分のヘラケズリの上から、さらに横ナデを行うもの(22)もある。ヘラケズリの方向は(25・27)が逆まわり、その他は時計まわりである。 * 天井部内面の調整は、狭い範囲に明瞭な仕上げナデをのこすもの(22・24)と、明瞭なナデの痕跡を残さず平滑に仕上げるもの(23・26・27)がある。また、(26)には同心円文のあて具の圧痕が広範囲にわたって重複してのこる。 * ヘラケズリ部分と天井部内面以外は横ナデを行う。 | * (25・27)をのぞくすべてが断面セピア色を呈する。 |
| | 蓋 C 28 | <ul style="list-style-type: none"> * 天井部は丸味をおびる。 * 稜線は断面三角形で小さい。 * 口縁部は高く、内湾気味に外にひらく。端部は面をもつ。 * 口径は11.9cmある。 | <ul style="list-style-type: none"> * 天井部の80%以上を回転ヘラケズリ調整する。 * ヘラケズリ部分以外の残存部は横ナデを行う。 | <ul style="list-style-type: none"> * 胎土は際立って精良である。 * やや軟質の焼成である。 |
| | 蓋 D 29 | <ul style="list-style-type: none"> * 天井部は丸味をおび、器高は高い。 * 稜線は丸味をおび鈍いが、大きく突出する。 * 口縁部は稜線から斜め下方にひろがる。端部は丸味をおびた段である。 * 口径は12.4cmある。 | <ul style="list-style-type: none"> * 天井部の85%を回転ヘラケズリ調整する。ヘラケズリの方向は時計まわりである。 * 天井部内面は横ナデを行う。 * ヘラ削り・仕上げナデ以外の部分は横ナデを行う。 | * 胎土に大きめの砂粒を含む。 |
| | 蓋 E 30 ・ 31 | <ul style="list-style-type: none"> * 天井部は丸味をおびる。 * 稜線は鈍い。 * 口縁部は内湾気味にほぼ垂下へのび、端部は段状の面をもつ。 * 口径は(30)が12.2cm、(31)が12.3cmある。 | <ul style="list-style-type: none"> * (30)は天井部の60%、(31)は70%を回転ヘラケズリ調整する。ヘラケズリの方向は逆まわりである。 * 天井部内面は、(30)は仕上げナデを、(31)は横ナデを行う。 * ヘラケズリ・仕上げナデ以外の部分は横ナデを行う。 | |
| | 蓋 F 32 | <ul style="list-style-type: none"> * 天井部はやや丸味をおびる。 * 稜線は小さく突出し鋭い。 * 口縁部は比較的低く、稜線部からほぼ垂下へのびる。端部は内側に傾き、やくぼむ面をもつ。 | <ul style="list-style-type: none"> * 天井部の85%を回転ヘラケズリ調整する。ヘラケズリの方向は時計まわりである。 * 天井部内面は広範囲にわたり仕上げナデ調整を行う。 | |

| 器形 | 番号 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|-----------|---------------|--|---|---|
| 蓋 F | 32 | * 口径は12.3cmである。 | * ヘラケズリ・仕上げナデ以外の部分は横ナデを行う。 | |
| 有蓋高杯 A | 39 | * 杯部たちあがりはやや内傾し直線的にのびる。口縁端部は丸味をおびた面をもつ。 * 受部は外上方に鋭くのびる。 * 杯部底部は扁平である。 * 脚部は高く、下からおよそ1/3の部分に突帯が1条めぐり。端部は外に傾斜する面をもつ。 * 断面形が長楕円の工具を突き刺して穿孔した小さなスカシが3方にある。 * 口径は10.8cm、器高は10.4cmある。 | * 杯部の受部以下約80%を回転ヘラケズリ調整する。ヘラケズリの方向は時計まわり。 * 杯部の内面は仕上げナデ調整を行う。 * ヘラケズリ・仕上げナデ以外の部分は横ナデを行う。 | * 脚端部に、小さな圧痕によりつぶれた部分が3方にある。重ね焼き時の痕跡と考える。 * 断面はセピア色を呈する。 |
| | 40 ～ 42 | * 杯部たちあがりは比較的低く、口縁端部は丸くおさめる。 * 受部はほぼ水平にのびる。 * 受部直下は丸味をおびるが、杯部底部は扁平である。 * 脚部は低く、大きくひろがる。脚端部は縁帯状に厚く外端面をもつ。また、縁帯状部分の頂部は鋭い突帯がめぐり。 * スカシはない。 * 口径は10.8cm、器高は8.5cmある。 | * 杯部の受部以下75～95%を回転ヘラケズリ調整する。ヘラケズリ方向は時計まわり。 * ヘラケズリ部分以外は横ナデを行う。 | * 杯部内面とたちあがりはセピア色を呈する。脚裾部の一部は軟質で橙色を呈する。 * (41)と(42)は同一個体の可能性が高い。 * 形態・手法・焼成が酷似し、同一製作者集団の手になるものである。また、高杯蓋Bはこれにくみあうものである。 |
| | 43 ～ 45 | * 杯部たちあがりはやや内傾し、直線的にのびる。端部は面をもつ。 * 受部は外上方にのびる。 * 杯部底部はわずかに丸味を帯びる。 * 脚部は短く、有蓋高杯Bに比べて直線的にひろがる。脚裾部はほぼ垂直にさがり、端部は丸くおさめる。 * 長方形のスカシが4方にある。 * 口径は11.0cm、器高は9.6cmある。 | * 受部以下の80～90%を回転ヘラケズリ調整する。ヘラケズリの方向は時計まわり。 * 脚部はカキメ調整を行う。杯部との接合部はカキメの上からさらに横ナデを行う。 * 底部内面は仕上げナデを行う。ナデの範囲は狭い。 * 他の部分は横ナデを行う。 | * 脚裾部の一部は軟質で黄灰色を呈する。断面はセピア色を呈する。 * 形態・手法・焼成が酷似し、同一製作者集団の手になるものである。また、高杯蓋Cはこれにくみあうものである。 |
| 無蓋高杯 | 46 | * 杯部だけの破片である。 * やや丸味をおびた杯部底部から、ほぼ直線的に外上方にひろがり口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。 * 体部中に、上を2条の稜線、下を1条の沈線で区画された文様帯があり、なかに波状文1条がある。 | * 杯部底部のほぼ全体を回転ヘラケズリ調整する。ヘラケズリの方向は時計まわり。 * 底部内面は、自然釉の破砕による器面の剥離のため調整は不明。 * その他の部分は横ナデを行う。 * 波状文の方向は底部を上にした状態で逆まわりである。 | * 灰黄色を呈するが、堅く焼き締まる。 |

| 器形 | 番号 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|------|------------------------|--|--|---|
| 無蓋高杯 | 46 | <ul style="list-style-type: none"> * 破片の割れ口から長方形スカシが穿たれていたことがわかる。何方かは不明。 * 口径は 18.2cm ある。 | <ul style="list-style-type: none"> * 口縁部を上にした状態で施文されたものとする。 | |
| 高杯蓋 | 高杯蓋 A 38 | <ul style="list-style-type: none"> * つまみを欠損する。 * 天井部はやや丸味をおびる。 * 稜線は外下方に小さくのびる。 * 口縁部は垂下してのび、端部は面をもつ。 * 天井部中央に櫛状工具による列点文を2重に綾杉状に施す。 * 口径は 12.1 cm ある。 | <ul style="list-style-type: none"> * 天井部の約 90%を回転ヘラケズリ調整する。ヘラケズリ方向は時計まわり。 * 天井部内面はせまい範囲で仕上げナデ調整を行う。 * ヘラケズリ・仕上げナデ以外の部分は横ナデを行う。 * 施文は、ヘラケズリ部分をさらに軽く横ナデし、器面を整えたうえで行う。 | <ul style="list-style-type: none"> * 全体にセピア色を呈するが、天井部外面には青灰色の斑があり、焼成時に高杯が重ねられていた様子が見える。 * 焼成は高杯蓋 B によく似る。 |
| | 高杯蓋 B 36 ・ 37 | <ul style="list-style-type: none"> * つまみを欠損する。 * 天井部はやや丸味をおびる。 * 稜線は小さいが鋭い。 * 口縁部は外にひろがる。端部は面をもつ。 * 口径は (36) が 12.2cm、(37) が 12.6cm である。 | <ul style="list-style-type: none"> * 天井部の約 90%を回転ヘラケズリ調整し、そのうえでさらに横ナデを行う。ヘラケズリ方向は時計まわり。 * 天井部内面のせまい範囲に、軽い仕上げナデ調整を行う。 * 他の部分は横ナデを行う。 | <ul style="list-style-type: none"> * 内面と断面はセピア色を呈する。天井部に自然釉を認めるが、円形に無釉の部分があり重ね焼きの痕跡を認めず。 |
| | 高杯蓋 C 33 ~ 35 | <ul style="list-style-type: none"> * つまみは中央がくぼむもの (33・34) と平らなもの (35) とがある。 * 天井部はやや丸味をおびるが、高杯蓋 B よりは扁平である。 * 稜線は小さいが鋭い。 * 口縁部は内湾気味に垂下してのびる。端部はややくぼむ面をもつ。 * 口径は (33) が 13.0cm、(3) が 12.3cm ある。 | <ul style="list-style-type: none"> * 天井部の 80 ~ 85%を回転ヘラケズリ調整する。ヘラケズリ方向は時計まわり。 * 天井部内面はせまい範囲を仕上げナデ調整するもの (33・35) としないもの (34) とがある。 * 他の部分は横ナデを行う。 | <ul style="list-style-type: none"> * (33) の天井部外面の無釉部分の分布から、長方形4方スカシの高杯が重ね焼きされていたことがわかる。また、溶着防止のために敷かれた植物繊維の痕跡が火だすき状にのこる。 |
| 甕 | 47 ~ 49 | <ul style="list-style-type: none"> * 頸部は外上方にほぼ直線的にひろがる。口縁部との境界に鋭い段をもつ。端部は段をもつ。また、口縁部と頸部にそれぞれ1条ずつ波状文がある (47)。 * 体部は肩が張り、中位よりやや上に最大径をもつ。中位に沈線で上下を区画した文様帯があり、なかに波状文が1条ある (47)。(48) は体部中位に円孔がある。(47) は円孔部分を欠損する。 * 底部は尖り気味の丸底である (47・48)。 * 口径は 10.6cm、器高は 9.7cm ある。 | <ul style="list-style-type: none"> * 体部と頸部の接合部直下の内面に指おさえを連続して認める。その上からさらに横ナデを行う (47)。 * (49) は体部にカキメ調整を行う。頸部接合時の横ナデがカキメの一部を消している。 * 底部内面には棒状の工具で丸底を突き出した凹凸を認める (47・48)。外面にはこれに伴う平行タタキメを重複して認めるもの (47) とナデとケズリを併用して平滑に仕上げたもの (48) とがある。 * 他の部分は横ナデを行う。 * 波状文の方向は口縁部・頸部のものが、口縁部を下にした状態で逆まわり、体部は不明 (47)。 | <ul style="list-style-type: none"> * (47・48) は小型である。 * (49) は大型か、または壺の可能性はある。 |

| 器形 | 番号 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 | |
|----|-----|---|---|--|---|
| 甕 | 小型甕 | 50 | <ul style="list-style-type: none"> * 頸部は外上方にほぼ直線的に高くたちあがり、口縁部近くでさらに外反する。端部は丸味をおびた面をもち、直下に断面三角形の突帯が1条めぐる。 * 肩はあまり張らない。 * 口径は14.6cmある。 | <ul style="list-style-type: none"> * 口頸部の内外面と体部との接合部の内面は横ナデを行う。 * 体部外面は平行タタキメを横方向のカキメで調整する。 * 体部内面は無文のあて具による凹凸が残り、それを軽くナデ調整する。 | <ul style="list-style-type: none"> * 軟質で、表面は褐色、断面は橙色を呈する。 |
| | 中型甕 | 51 | <ul style="list-style-type: none"> * 頸部は外上方に直線的に大きく広がり、口縁部近くでさらに外反する。端部は丸味をおびた断面三角形を呈し、口縁直下に低い突帯が1条めぐる。 * 体部は肩部にむかって直線的にのびる。 * 口径は22.6cmある。 | <ul style="list-style-type: none"> * 頸部の内面には指の圧痕が連続してめぐり、その上から横ナデを行う。口頸部の他の部分は横ナデを行う。 * 体部外面は平行タタキメを残す。 * 体部内面は木製の無文あて具による凹凸が残り、木目が同心円状に浮き出る。 | <ul style="list-style-type: none"> * 断面はセピア色を呈する。 * 底部破片は内外面ともセピア色を呈し、火だすき状の痕跡を認める。 |
| | | 52 | <ul style="list-style-type: none"> * 頸部は外上方に、高く外反気味にたちあがる。 * 口縁端部は、(51)の口縁端部と突帯が接したような形状を呈し、丸味をおびる。 * 口頸部の中位よりやや上に、鋭い突線2条で上下を区画した文様帯があり、中に波状文が1条ある。 * 体部は肩が張る。 * 口径は16.7cmある。 | <ul style="list-style-type: none"> * 口頸部は内外面とも横ナデを行う。 * 波状文の方向は口縁部を下にした状態で逆まわりである。 * 体部外面は平行タタキメをカキメ風の平行条線で調整する。頸部との接合部直下にはタタキメはおよばず、平行条線のみを認める。 * 体部内面は、頸部との接合部から肩部にかけて縦方向のナデで調整する。それ以下にはあて具の同心円文が残る。 | |
| 53 | | <ul style="list-style-type: none"> * 口頸部はわずかに外傾してたちあがり、中位から外上方に外反する。 * 口縁部は、丸くおさめた端部から外広がり気味に垂下する外端面をもち、外端面の中央に沈線が1条ある。口縁部直下には断面三角形の突帯が1条めぐる。 * 体部は縦長で、最大径は中位よりやや上にある。 | <ul style="list-style-type: none"> * 口縁部内外面と頸部内面は横ナデを行う。突帯部以下の外面には横方向のカキメを行う。 * 体部外面は格子目風の平行タタキメを残し、さらに横方向のカキメをほぼ等間隔に15条施す。 * 体部内面はあて具の同心円文を半ナデ消しする。同心円文は底部から上にむかって印される。下半は同心円文がよく残り、上半は比較的入念にナデ消される。 * 底部外面には丸底をタタキ出した際のタタキメを重複して認める。 * 底部内面に同心円文を認めず無文のあて具をもちいて丸底をタタキだしたのちと考える。また、不定方向のナデを認める。 | | |

| 器形 | 番号 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|----------|---------|--|---|--|
| 甕 大形甕 | 54 | <ul style="list-style-type: none"> * 口頸部は外上方にむかってほぼ直線的にたちあがり、口縁部近くで外反する。 * 口縁端部はわずかに垂下する面をもち、下方に断面三角形の低く鋭い突帯が1条めぐる。 * 頸部には浅い沈線2条で画された3段の文様帯があり、それぞれに波状文が1条ずつある。 * 体部は肩が張り、最大径は中位よりやや上部にある。 | <ul style="list-style-type: none"> * 口頸部の外面の、突帯より下は横方向のカキメ調整を行う。体部との接合時の横方向の不連続ナデは、カキメの一部を消している。 * 口頸部の内面は横ナデを行い、一部に横方向のカキメを認める。体部との接合部の内面は横方向の不連続ナデを行う。中位には、指頭による圧痕を連続して認める。 * 体部の外面はカキメ調整をハケメ風に不定方向・不連続に行う。基本的に下半は右上がりに、上半は横方向に行う。体部にはタタキメを認めない。 * 底部の外面は平行タタキメを横方向の連続したカキメで調整する。 * 体部の内面は、あて具の同心円文を上1/3はナデ消し、下2/3は不定方向・不連続のカキメで調整する。カキメは基本的に横方向である。 * 底部の内面に同心円文を認めないが、若干の凹凸がある。ナデによって平滑に仕上げる。 | <ul style="list-style-type: none"> * 焼成の感じは甕(53)とよく似る。 * 底部の2箇所、焼成時のササエ部分のへこみを認める。 |
| 土師器壺 | 図11・写真8 | <ul style="list-style-type: none"> * 口縁端部をわずかに欠損する。 * 頸部は直線的に外上方にたちあがる。 * 体部は中位に最大径があり、若干横に長い球体を呈する。 | <ul style="list-style-type: none"> * 頸部内外面は横ナデを行う。口縁部近くには縦方向のハケメを認める。 * 体部外面は、肩の部分はハケメ、中位から底部にかけてはナデを行う。 * 頸部と体部の接合部の内側には横方向のケズリを行う。 * 体部内面の上半は左上がり・縦方向のナデ、中位は横方向のケズリ、底部は不定方向・不連続のケズリを行う。 | <ul style="list-style-type: none"> * 淡い橙色を呈し軟質で、器面の状態はあまり良くない。 |

付載 鉄錆に被覆された有機質遺物の分析

1 はじめに

古墳から出土する金属製品に布や皮革・木質・漆塗膜などの有機質が付着する例はごく普通に観察される。これらの有機質遺物の多くは金属製品に発生した錆に被覆されることで現在まで消滅することなく遺存したものである。有機質遺物を金属製品から単離してその材質を分析することはかなりの困難を伴うもので、従来の報告の多くは有機質遺物の外観が報告され、多様な遺物の材質が一括して報告されることはほとんどなかった。

幡枝2号墳で出土した金属製品は金具や刀剣、鎌などすべて鉄製品で、その一部に鉄錆に被覆された布や木質が認められた。これらの有機質遺物についてそれぞれから小片を試料として採取し、樹脂包埋して研磨により薄片の顕微鏡標本を作製し、細胞レベルの観察によって繊維・木材・矢柄の材質を検討した。

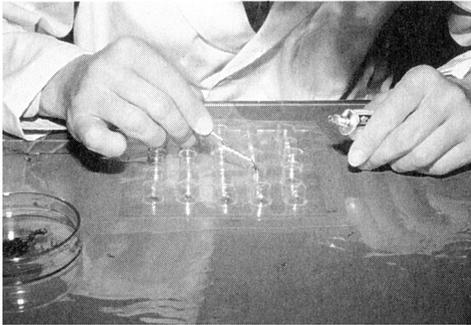
2 顕微鏡標本の製作（写真12）

有機質遺物の材質の同定は遺物の細胞レベルの観察による。細胞観察は通常生物顕微鏡や走査型電子顕微鏡によるが、以下では生物顕微鏡による観察標本の製作方法を述べる。

①試料の採取 試料の大きさは有機質遺物の内容により異なるが、布では経糸・緯糸が確実に含まれること、木質は木口・柾目・板目の各面でそれぞれ3mm角程度を必要とする。鉄錆ごと試料をカッターナイフやニッパで採取し、複数採取できればより精度の高い同定につながる。

②樹脂包埋 試料を予め準備した台（ポリエチレンフィルムを利用する）に観察予定面が③で行う研磨面と直角になるよう固定する。接着剤は瞬間接着剤を用いる。塩化ビニールのリング（内径16mmのチューブを長さ1cmに輪切りにしたものを予め準備）で試料の周囲を囲み、透明な合成樹脂（充填用エポキシ樹脂）を充填する。エポキシ樹脂は硬化前に真空ポンプで脱泡して静置し、樹脂ブロックにする。

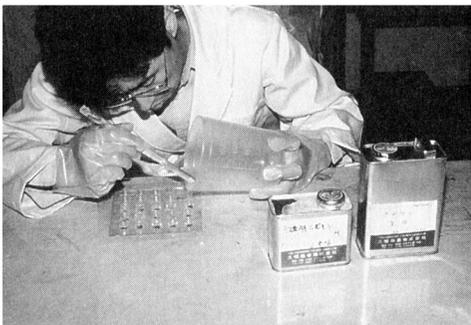
③観察面の研磨 布は経糸・緯糸の両断面が、木質は木口・柾目・板目面が正確に観察できるように実体顕微鏡で検鏡しながら樹脂ブロックを研ぎ出す。鉄研磨板で粗研ぎ（#800）、ガラス研磨板および耐水ペーパーで仕上げ研磨（#3000）を行う。



1 試料を採取する



2 試料を接着材で固定する



3 試料を樹脂包埋する



4 試料を研磨する



5 観察面を接着する



6 仕上げの研磨をする

写真 12 顕微鏡標本の製作工程

④スライドガラスに試料接着 研磨の終了した樹脂ブロックの試料面を鉍物用スライドガラスに透明エポキシ樹脂で接着する。

⑤薄片仕上げ 鉍物ガラスに接着した試料が透過光で観察可能（約 10 数 μ m の厚さ）になるまで検鏡しながら研磨（③と同じ工程）する。樹脂包埋ブロックが分厚いときはベルトサンダーでケズリ、製作時間の短縮化をはかる。

⑥封入 完成した薄片は試料面保護のためオイキットで封入してカバーガラスをかけ顕

微鏡標本の仕上げとする。

3 有機質遺物の観察結果（カラー図版 2、図版 19）

繊維類 金具 1 表面観察でみられる平滑面の周辺部の黒色は漆塗膜の可能性がある。その裏面には布が付着する。試料を単離することができず、繊維の材質は不明。

金具 2 平滑面の裏面に布目が良好に残る。検鏡試料では絹布層が認められ、さらに試料 1 と同様の角張った植物繊維断面を認める。

金具 3 平滑面の周辺部は完全に錆化するが、平滑さから金具 1・5 同様漆が塗布された可能性がある。その裏面に布が固着する。布は数層からなり、各層ごとに漆で固着したものであると思われる。検鏡試料は採れず。

金具 4 平滑面で部分的に光沢を認めるが性質は不明。その裏面に絹布が認められる。検鏡試料採れず。

金具 5 平滑面の一部に漆塗膜らしきものがあり、その裏側に布が付着する。一部に布を固着したと思われる漆膜様の光沢がみられる。顕微鏡観察では布が 1 層確認され、繊維の形状が不等辺三角形であることから絹と判断できる。他の試料では植物繊維の断面を認める。繊維の断面の形状は不明である。

金具 6 平滑面に銚の部分にごくわずかに漆塗膜らしき光沢を持った部分が観察できる。裏面に布が付着。検鏡試料では間隔をおいて絹布層が 2 層認められる。

金具 7 布の付着する面は漆で固着した可能性があるが光沢は確認できない。検鏡試料採れず。

金具 8 平滑面の裏面に絹布を認める。検鏡試料採れず。

金具 11 平滑面で部分的にチリメンしわのような鉄錆を認める。検鏡試料は採れず。

以下の 3 点は金具から剥離したものである。試料 1・2・3 とする。

試料 1 布だけが残っており、厚さは 2mm 近い。片面が平滑で、金属面から剥離したものである。顕著な光沢は認められないが、他の試料同様漆で固着されたと思われる。検鏡の結果、絹の布が 5～6 層重なる部位が認められる。絹布の糸の断面はかなり扁平であり、きめた 砧が打たれた可能性がある。絹糸 1 本中の繊維数は約 80 本計数される。他の検鏡試料では 1 層の絹布層と植物繊維層が認められ、植物繊維の繊維断面は角張っており、内部に同心円状の空隙が幾層かみられる。

試料 2 検鏡試料では絹布断面と植物繊維布断面がともに観察される。絹糸は試料 1 に

みられるそれと比較してやや丸みを帯び、1本の糸が二つの単位からなり、2本の糸を撚り合わせて1本の糸にしたとみられる。繊維の本数は80本前後である。植物繊維の糸断面にみられる繊維は、繊維細胞が6～10個癒着した状態のものが多く単離したものは少ない。繊維断面の形状は、内部に髓孔がみられる大麻の類とみられるものと、角張って同心円状の空洞がみられるものが1本の糸内に認められる。

試料3 いくつかの金属製品の細片があるが、大部分に布の付着が認められる。検鏡試料では他の試料にみられない非常に多数の絹の繊維(約300本)からなる紐が認められる。金属の直上に絹布が1層、その上に植物繊維による布が2層、さらにその上に絹布層が4層認められる試料がある。試料では絹布の糸の繊維の本数が約40本のものと70～80本の2種類がある。植物繊維(麻の類その他)の布は繊維断面の形状から2種類に分類可能である。

以上の観察結果を総合すると、金属製品に本来貼重ねられた布の構造は、金属の表面に絹の布が1層、さらにその上に植物繊維による布が2層、さらに絹の布が4層程度貼られたものとみられる。絹および植物繊維の顕微鏡観察による特徴は以下のものである。

絹糸の繊維数 絹布の断面から1本の糸の繊維数を計数した結果、以下の3グループに分類できた。

(a) 約40本のグループ(カラー図版2の3) 金具2・5

(b) 約80本のグループ(カラー図版2の4) 試料2

(c) 約300本のグループ(カラー図版2の5) 試料3

(a)を最小単位の糸とすると、(b)は(a)を2本撚り合わせた単位と考えられる。経糸・緯糸との関係では(a)が経糸、(b)が緯糸に相当する。(c)は(a)・(b)と異なり、繊維数が非常に多く、糸というよりも紐の可能性が高い。3分類した絹糸の繊維の断面の大きさはどれも比較的均質な不等辺三角形で、繊維の長径15 μ m、単径7 μ mを測る。絹布の織り密度は表1に示したとおりであり、同時代の他地域の織り密度に近似した値が得られている。糸の撚りは観察できたものはすべて右撚りである。

植物繊維 植物繊維は断面形状から2種類に分類した。前者は植物繊維細胞に明瞭な髓孔がみられるもので、その形状は大麻に酷似する。後者は明瞭な髓孔が認められず、同心円状の空隙を持つ。植物繊維はどちらも繊維が単離せずに6～10細胞が固まっており、当時の植物繊維加工技術を示すものとみられる。

矢柄 鉄鏃に遺存した矢柄断面の観察で鉄鏃30、62、63、64、65、66、67、68、70の

表 1 出土繊維の織り密度

| 番号 | 経 / 緯 (本/cm) | 撚り (経 / 緯) | 糸 1 本の 繊維数 (概数) | 経 / 緯 (本/cm) | 撚り (経 / 緯) |
|--------|-----------------|---------------|-----------------------|-----------------|---------------|
| 金具 2 | 42/36 | ?/S | 40 | | |
| 金具 3 | 44/36 | S/? | — | 6/6 | S/S |
| 金具 4 | 46/36 | ?/S | — | | |
| 金具 5 | 40/36 | ?/S | 40 | | |
| 金具 8 | 10/ 8 | S/S | — | | |
| 試料 1 | 68/26 | S/? | 80 | 60/34 | ?/? |
| 試料 2 | 52/28 | S/? | 80・40 | 6/6 | S/S |
| 試料 3-1 | 52/46 | ?/S | 80 | 6/6 | S/S |
| 試料 3-2 | 48/26 | ?/? | 80 | | |

(注) 金具 3、試料 1・2・3-1 では 2 種類の布が確認できた。S は右撚りを示す。

検鏡試料でイネ科植物に特有の維管束が認められ、タケ亜科（ヤダケ？）と判断できる（カラー図版 2 の 7）。鉄鏃 30 には矢柄部分に糸を巻くが、糸の繊維がすでに分解して空洞で材質は不明である（図版 19 の 6）。

東棺出土鉄剣附着の木質 鉄剣 21 に附着した木質は鞘の一部とみられ、針葉樹で年輪界は急。柾目面にみられる放射組織の分野壁孔はヒノキ型である。板目面の放射組織は単列であり、木材はヒノキ科とみられる（カラー図版 2 の 8、図版 19 の 7・8）。

4 まとめ

幡枝 2 号墳出土の鉄製品表面の有機質遺物について硬質樹脂に包埋して顕微鏡標本製作による分析を行った。繊維製品では絹布と植物繊維による布が観察できた。絹布の糸を構成する繊維の本数に 40・80・300 本程度の 3 種類の構成を認めた。植物繊維由来の布は繊維細胞断面の形態に数種類が観察され、繊維細胞が 5～6 本単位でまとまる傾向が認められた。鉄鏃の矢柄にはタケ亜科が用いられていた。鉄剣の鞘はヒノキ科であった。以上のように、鉄鏃に覆われた有機質遺物の同定において、硬質樹脂に包埋・研磨による顕微鏡観察は非常に有効といえる。

参考文献

- 1 岡田文男「出土繊維製品の観察」『日本文化財科学会第8回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 1991年
- 2 布目順郎『絹と布の考古学』雄山閣 1989年
- 3 島地 謙・伊東隆夫『図説木材組織』地球社 1982年